

を疑つて」眞「イヤ疑ふ疑はぬに拘はらぬ、全體斯様な事は確かな證據がなくては口外する者でない、假令眞實でも人は偽と思ふから言はぬが徳だ、若し之を言立て辯護する日には何うしても辯護の立ち様がない、君、此事は再び口へ出し給ふな」武「でも眞實だから言立ぬ譯には行かぬ」眞「其では誰れか外の辯護人を頼み給へ、僕には此様な辯護は出来ぬから」と言捨て早や立去らんとするにぞ武保は失望に心亂れ我知らず大聲を發し武「君までも僕を見捨てるのか」眞倉は後を振向きて眞「イヤ見捨てはせぬ、今は君の心が暴て居て何を云つても分らぬから明日又來やう其までに能く考へて置き給へ」と纒に慰めの言葉を殘し、其儘に立去りたれば張詰めし武保の心も今は全く弛み果て武「ア、最う駄目だ絶望だ」と斯く叫びながらウムと後に反り倒れ其儘に氣絶したり。憐れむべし武保は全く絶望の深淵に陥たるなりき。

一五 大川の決心

話し變つて此日山堂家にては朝早くより直家老人、星川侯爵夫人、錦嬢及び二人の叔伯母、代言人大川萬英等一室の裡に額を集め今にも牢獄より辯護人眞倉が武保の言立を聞き歸り來るかと思ふ沙汰をのみ待つ中にも錦嬢は初めより娘心の一筋に唯武保が無罪を信じ、今日は一言にて立派に身の罪を言開き眞倉と手を引きて勇み歸らんと思ふに依り衣服を更め其容貌も日頃よりは最と晴々しく見えたり去れど其外の人々は何れも半信半疑の間において武保如何なる言開きをなすならんと安き心もなく互に顔色を謹みて何氣なく構へ居れど胸には無量の心配を蓄へ自然と言葉さへも濕り勝なり、頓て九時半を過ぎ十時をも過たれど眞倉は影さへも見えざれば人々の心配は益々重り終には堪え得ずして彼の武保の下僕案藏をば見届けの爲め牢獄まで遣はしたり、其後には人々唯青き顔色を増すのみ宛も死人の枕許に通夜する人の如く互ひに氣兼ねて呼吸さへも自由になし得ざるばかりなり。此所へ宛も武保の身の上を心配してか彼の過激醫者と呼ぶ、關登遮だしく入來り一座の内を見廻して關「イヤ最う此澤部町と云ふ所は狭い土地で武保の噂ばかりだ、今も道々拙

者を引留め右左から武保の事件は何うなつたと蒼蠅い様に問掛る、昔から此事件ほど人の心を騒がせた例はない、時に未だ何の便りもありませんか、直家と大川は口を揃へ、「イヤ未だ其便りがないので」錦嬢も堪へ兼ねて言葉添へ、錦「先生餘り眞倉の歸りが遅いので妾は心配でなりません」と聞て關登は獨り呑込み、關「イヤ嬢様此事件が五分や十分で済むと思つては間違ひます。此事件の奥底には必ず非常な事情があるから武保に罪がなくても爾容易には救はれません、ナニサ心配する事はない遅くとも最う眞倉が歸りませう」と云ふ折しも眞倉は安藏と共に歸りて此一室に入來れり、人々は待構へ居る事なれば先づ其様子を見るに正直なる顔には心配の雲を浮べ眼の常の如く牙へさるは武保が言開きの立ざる證據ならんと見て取りたる人々の失望言はん方なし、錦「眞倉さん最う武保は助かりませんか」眞倉は最も氣の毒氣なる調子にて眞「左様サ随分六かしうございます」此時まで嘆息をのみ發し居たる侯爵夫人は殆ど泣聲を出し、夫「妾の息子が助かり悪いと仰有りますか、シテ彼れは何と申しました」武保が言ひたる事の次第は固より輕しく他言すべき事に非

ず殊に錦嬢を初め女の前にては猶更言出し難き事なれば眞倉は最と迷惑相に直家老人を打眺め眞「御婦人方には少々憚る事もありまして」此言葉を聞き錦嬢の二人の叔伯母は早くも氣を利せ、嬢と侯爵夫人を引立て靜かに一室に退きたり。此後に眞倉は靜かに座を占めて老人に向ひ眞「何うも武保の言立は實に受取難ふございます、彼れが申すには黒戸伯爵の夫人と兼てより密通致して居た所此度錦嬢と婚禮致すに付き、夫人が此婚禮を妨げんとて武保の手許に残る手紙などの證據物を残らず焼盡し、夫人自ら家に火を附け伯爵を狙撃したのだと申します」と聞くより早く直家老人は活と怒り直「夫は虚じや、あの夫人に限り其様な事がある筈がない」眞「私も爾思ひ武保に爾申しました」聞居る中にて大川萬英は都より來りし人にて日頃黒戸夫人の品行名譽を知らぬ故左まで此事を怪しとも思はず默然として聞居るは無理もなし。之に引替へ如何にせしか醫師關登は獨り得たり顔にて驟然と起ち關「イヤ君方の考へは間違つて居る僕は初めから武保と夫人の間を疑つて居ました、成る程夫人は名譽が高い併し戀に上下の隔なしで幾等名譽のある人でも此道ばかり

は別物だ、殊に夫人が別當か乞食にでも惚たと云ふなら怪いが武保に惚るのは當り前だ、錦嬢さへ武保を愛するではないか名譽の高いあの夫人が名譽の高い武保を愛するに何の不思議はありません、是は僕ばかりでなく既に大川君も内々疑つて若し武保に色女はなかつたかと先日僕に聞いた僕は其時既の事夫人と武保の怪しい事を言んとしたけれど明瞭には云ず、唯言葉を濁らせて置いたのだ、且つ又た大川君は其前から案藏にも聞き、區長仙田にも問合せし其上夜々俱樂部を初め人の集る所へ忍び行き其となく武保の行狀と黒戸夫人の日頃とを探つて居たのは僕が證人だ、エ、僕が證人だ、未だ是だけではない、あの火事の晩判事輕袋が初めて太々郎を詮議した時、太々郎が黙つて居るのを夫人が彼れに目配し且言葉で促した、爾すると太々郎が口を利た是が第一怪しい抑々夫人が太々郎を拾ひ上げたのも決して慈悲ばかりの爲ではない其時から既に色々と太々郎を手懐けて大事の時の申立を密々氣永く教へ込で置いたのだ、だから太々郎が放火人は星川の旦那だと言つた時夫人は眼に一種恐しき怨の喜びを現した、人々は夢中になつて居たけれど僕は充分夫人の様子を

窺つて居て其眼に籠る深き怨みと満足の光を見てハテ變だと考へた夫からして色々氣を付けて見るに怪い事が澤山ある、第一夫人はあの夜季の娘を看病して居たと云ふけれど是が處です季の娘は唯風を引た丈で何も夜通し伽をして看病する程の病氣でありません其前々から毎夜伽を仕たのは心に所夫を殺す謀があつて心配で寝られぬから伽を名として獨り起て色々考へて居たのだ夫で武保に逢ひ手紙を焼て仕舞た後其足で直に伯爵が寢間の庭へ廻り火を付けて伯爵を呼出し出て来る所を狙撃にしたのだ、是にも一つ證據がある」と云ひながら人々の顔を見廻したり。

醫師關登は四邊を見廻つ、言葉を續け、關若し黒戸夫人が毎夜自分で伽をする程我子供を愛するなら火事の時に第一に先づ子供を救出し相な者だ、然るに夫人は子供の事を打忘れ子供は太々郎が救ひ出したと云ふではないか、シテ見れば夫人は所夫を狙ひ撃ち其足で直様子供の寢間へ引返したけれども、此時既に煙が一滿になつて其寢間へ這入ぬから、據所なく又も外へ出て伯爵の死體の傍へ行たのだらう、夫も伯爵を介抱する爲よりは寧ろ其

死だか死ぬかを見届ける爲であつたかも知れぬ、全體女と云ふ者は所夫より我兒の事を心配する者で火事の時に兒を忘れると云ふ事はない、夫是の事で僕は第一に夫人を疑つたら其翌日も黒戸家へ行き、夫人に逢た時色々氣を付け且夫人に問糺したが僕の僕ひは益々深くなつた僕は夫人の眼を充分に見詰めて奥様昨夜太々郎が星川武保を見たと申し立ましたが貴女はあれを不思議とは思ひませんか太々郎の心は何と思ひます」と厳く問た所、夫人は非常に狼狽して殆ど氣絶する程であつたが漸く氣を取直して彼れは折々正直に歸る事がある様ですと答へたが其言葉は曖昧で漸と聞取れた位だ次に太々郎は何故貴女の言ふ事ばかり聞のでせうと尋ねたら益々當惑の體で彼れは丁度犬が其飼主の心を斟酌する様な者だと答へた、君方は之を怪しいと思はぬか僕は必ず太々郎こそ夫人の道具に使はれて居ると思ふ何でも彼奴は充分に此犯罪の次第を見知て居るに違ひない、だから太々郎が馬鹿でないと云ふ證據を上げ彼れに口を開かせて心に在るだけの事を言立させれば武保は助かるのだ然るに裁判官から言付つて來る醫者は何れも太々郎の心を見破る事が出來ず多勢を頼ん

で僕の診斷を打消すから仕方がない」虚か實か知らざれど獨り合點して述來る此道理らしき言葉に直家老人も今は感心し直成る程爾聞て見れば武保の言立が實かも知れぬ」と云へど眞倉は猶ほも動かさず眞「それでも五年が間密通して居て何の證據もないと云ふ筈はない」關「イヤそれが間違ひだ眞に用心深い女なら決して證據の残る様な迂闊な事は爲さない」大川も之に言葉を添へ大「左様さ是で最う愈々證據が消て仕舞つたと充分に見届けた上でなくては夫人も此様な大膽な事は致しません、證據を消して仕舞つたので猶更ら夫人が疑はしい」眞倉は此時一入眞面目になり眞「イヤ茲で其様な水掛論は無益です、それよりは先づ辯護の手續きを考へねばなりません、今武保の云ふ事を誠としても之を裁判所で言立る事が出來ますか、何の證據もなく斯様な事を云立て判事が實と思ひますか」一同は此問に困り果て何の返事もなく唯顔を見合すのみ、眞倉は猶ほ言葉を進め眞「若し公判の時となれば此土地の人十二名を選び陪審員と致します、此の土地の人で夫人の名譽を慕はぬ者はなく又此頃では武保を罪人と思はぬ者はない故其十二名の前へ出で武保が余は黒戸

夫人の密夫であると云立てたなら何うでせう、陪審員は申すに及ばず満場の人々は一時に立腹し口々に武保を罵ります。夫で掛官が人々を制し、武保に其證據を示せと云ひませう。其時證據は是々の次第で残らず消へて仕舞つたと言へば誰が實と思ひますか。今まで武保を可愛相と思つて居る人々迄も武保をば卑劣極まる男だと見下けます。サア斯なれば假令武保に罪がなくても助かり様がありません。其處で辯護人から黒戸夫人を法廷へ引出し武保と對審させて呉れと請求します。成る程此請求は立ませう、立ましても何の益にもなりません。此請求に公判を中止して夫人に召出状を發すれば夫人は前以て心待にて居る故腹の中で武保を一言で言込る勇氣を蓄へて上部は態と悄らしく構へ所夫の看病に夜の目も碌に眠らぬと云ふ様な青い顔をして身には眞黒な服を着け徐々と法廷へ出て参ります。此殊勝氣な容貌を見たばかりで人々は先づ夫人を憐れみ武保を憎むの心を起します。頓て靜かに裁判官の前に立てば判官は之れに向つて呼出の理由を説き聞かせます。説聞かせても初めは分らぬ振で問返します。其時再び説聞かせると夫人は初めて合點の行た様に驚いて震

へ上り暫らく無言の儘で呆れて居ませう。頓て心を取直した體で目毗逆立ち朱唇震ひて玉散る様な清い哀れな聲を出し判官閣下此人は妾が所夫を殺さんと企てながら猶それにも飽足らず今は妾が名譽を迄も汚さんと謀みます。妾は人の妻であります。妾は愛兒の母であります。法廷に引出され斯る汚らはしき讒言に返答しては臨終の際なる妾が所夫に對し合せる顔がありません。判官閣下妾は此恐しい人に返事は致しません。甘じて判官閣下の御判断を仰ぎます」と斯う立派に言立れば武保は何うなりましたか。此雄辯を聞き來りて直家老人は涙を流し、直「イヤ最う爾なれば武保は助かりません。何とか工夫をして下さい」眞「ですから武保の言ふ事が虚でも實でも私には辯護が出来ません」と云ひながら大川に振向き、眞「君は心で武保の無罪を信ずると仰有るが僕に辯護の工夫がありますか」と問はれて大川は最迷惑相に頭を掻き大「イヤ私には工夫はありません」眞「ありますまい、好んば愈々夫人が所夫を殺したと云ふ證據があつても武保は共犯になり同じ罪に落されます」此恐しき言葉を聞き直家老人は涙に潤む聲を震はせ、直「最う武保は助かりませんか、そ

れでは錦嬢は何うします、武保が罰せらるれば嬢は必ず泣死します、コレ眞倉さん爾言すに武保を助けて遣て下さいな、此老人の願ひだ、コレ眞倉さん君は今まで数多の人を助けたから無理でも武保を助けて下さい」と泣ながら眞倉が肩に取纏る老人の悲みは思ひ遣るさへ哀れなり。

醫師關登も見るに見兼ね、眞倉が肩を叩きながら關「コレ眞倉君の君の雄辯は我地方の名譽になつて居るよ、君が此辯護を引受けんと云ふ事はない、コレ其様に頭ばかり垂れて居すに、これは是程立派な公事はない奮發し給へ」と言へど眞倉は垂れし首を揚げも得遣らず「眞イヤ僕は自分の心で堅く信ずる公事でなければ辯護は出来ぬ心で危んだ日には議論が口から外へ外ぬから駄目だ、此辯護は何うしても大川君だ」とて聞入るべくも見へざりき。

眞倉は暫し考へたる末重ねて大川萬英に向ひ眞「僕には何うしても此辯護は出来ぬから君に譲らねばなりません」と明かに断りたり。抑も辯護人が名を擧ぐるは總て他人の見捨

たる公事を引受け見事に辯護の功を立つるにあり、澤部町第一等と云はる、眞倉が既に魁を投たる者をば今若し大川が引受けて判事を挫き陪審員を動かし一身の才と力を以て武保を救ひ出さば大川の名譽は忽ち上らん殊に此事件は最珍らしき奇獄にして其事貴族の身上に拘はり今は巴里の新聞紙にさへ出で殆ど全國の人之れに目を注ぐ程なれば年若き代人人は何れも一年の所得を抛ちても斯る辯護を引受んと望むなるべし。去れど大川萬英は年若きに似ず實着の人なれば容易には眞倉の言葉を承知せず大「イヤ眞倉君、君が武保殿を見捨てたと云ては世間の人は申すに及ばず係り官に至るまで益々武保を疑つて彼れは最う眞倉にまで見捨られたから充分罪があるに違ひないなど、思ひ込むは必然だ係官に斯う思はれては何の様な事をしても無益のゑ鬼に角君は辯護人になつて呉れ給へ僕は君の指圖を受け出来るだけ働らくから」と言へば關登も言葉を添へ關「爾とも眞倉君、君が見捨てたと言つては到底も助からぬ故、眞倉君、君は決して此事件を遮絶する事は出来ないよ内實は大川君が働くとしても眞倉君が後見の姿となりたまへ」眞倉も今は辭むに由なく溢々

と口を開き眞「イヤ僕は從來山堂、星川の兩家に對し一方ならぬ恩を受けて居る故無下に
斷るも本意でない若しも大川君に充分議論の工夫があらば僕は辯護人と言ふ名前で大川君
の相談相手となりませう、シテ大川君、君には辯護の工夫がありますか」此時まで大川萬
英は唯だ平々凡々たる一通りの代言人にして何の優れたる所もなしと人々に思はれ居たる
も今や愈々此大事件の我一手に落たるを見て、滿面俄かに晴渡り眼に充分の智慧を光らせ
笑を含んで立上りしは全く別人かと思はる、許りなり。大川は一座を見廻し人々が心の奥
までも響く如き最と晴れたる音調にて大「私は第一に先づ武保殿に逢ねばなりません逢て
二三の事を聞かせば夫で心が定まります、併し大體の工夫は既に出来て居ます、皆様御存
じの如く私は初めから武保殿を無罪と信じますゆゑ骨身の碎くるまでは辯護します清き天
女とも言はる、錦嬢に愛せらる、武保が何うして汚らはしき罪を犯しませう、私は一々
武保が言立を實と思ひます故、是から其證據を集めます、武保は自分で一切の證據が消え
盡したと言いますれど是れは武保の間違ひです證據は決して消えませんが、探せば必ず出て來

ます、成るほど黒戸夫人は用心が深からう、併し用心する者は益々人に目を附られ隠す者
は益々疑はれます、隠れた人は世間を見ねど世間は隠れた人を見て居ます、若私 が愈々此
辯護を引受れば直様判事と反對の證策を初まず幸ひ星川山堂の兩家は世間に尊敬せられて
居る故誰でも喜んで助けます、今より二日と経ぬ中に佛國第一等の探偵を雇ひ入れこれに
證據を探させます、彼の武保が別荘のある林町は幾等淋しい所でも深山の中ではありませ
ん目のある人が住で居ます、此町の人々を残らず尋ね、一人一人に尋問すれば必ず一人や
二人は黒戸夫人が彼の別荘に入込む所を見た者がありませう。黒戸夫人と尋ねては分らん
でも斯様な姿で是々の服を着けた覆面の貴夫人と言へば誰れか知つて居るに相違ない、是
が則ち第一の證人となります次には英國の警察へ頼み彼の英人丸瀬と云ふ者を探します。
若し此男が南半球に居るとならば今は海底電信で一週間内に詳しい問答が出来ませう、又
一方では探偵を出し別荘に使はれた英國の下女を探します。武保が云ふには此下女は夫人
を見た事がないと申しますれど、其様な筈はありません。下女など、云ふ者は壁に耳を附け

てまで、主人の内幕を知り度がる者ゆゑ必ず一廉の證人となりませう、未だ是だけではありませんが、私は別荘に出入した者を残らず調べます、植木屋、疊屋、造作屋は申すに及ばず飲食店の雇人から紙屑拾ひまでも残しません次に巧者な探偵を此地へ連れて来た輕義判事と同様の事を取調させます、爾すれば必ず判事の誤りも分りませう、殊には醫師關先生の言葉に従ひ太々郎の口を開けます巴里の探偵には愚人の心を見破るのを専務として居る者もあります、此者を連れて来て、太々郎と一つの病室へ入れて置けば一週間の中には彼れが口を開かせます。私は人間の力の及ぶ限りは何の様な事をしてなりと武保を救ひ出します、無罪の人を救ふのに何の出来ぬ事がありませう」と懸河の辯を振ひ去れば人々は初めて大川の技倆を知り地獄で佛に逢ひたる想ひをなせり。中にも關登は躍り起ち關實に一場の大演説愉快くと叫べば眞倉も漸く口を開き眞「イヤ君の考案には感心した」大「イヤ僕の考案だけでは何の益にも立ません君の力を借らねば」眞「斯う立派に工夫の定まる上は及ばずながら盡力しませう」と相談漸やく定まりたれば人々は發と安心

の呼吸をつきたり、去れど猶ほ安心ならぬ一條あり开は錦嬢に此事の本末を知らすべきや如何にとの事なり、嬢は唯一筋に武保を思ふ者なるに若し武保が黒戸夫人の密夫なりし事を知らせては如何なる事を仕出來すやも圖られず去れば人々は猶ほも相談の上嬢には飽までも此事を包み置かんと評議を定め之にて各々立別れたるが、唯だ大川と眞倉の兩人は猶ほ辯護の手續きを相談し且は判事輕義より下附されたる豫審取調書類の講究を初めたり。

一六、棟田探偵

△下女薄木歌(原名、スキーウート) △探偵棟田(原名、トリー、ダー) △探偵原白(

原名、ハラウス)

大川萬英が辯護の工夫には左しも頑固な眞倉までも感心して共に辯護する事を約せし程なれば其仕の人々は俄かに大川を神佛の如く力と頼む事とはなれり、斯くて翌日の朝大川は穿鑿に必要な廉々を聞糺す爲め武保に面會せんとて眞倉と共に牢獄へ行き先づ番人爾太

郎に逢ひ、輕囊の許しを得て面會に來りし旨を告るに蘭太郎は最と氣の毒なる顔色にて
蘭星川様は最う了ません早く何とかせねば失望の爲に自殺しませうぜ」眞「ナニ自殺、
成る程失望の餘り牢獄で自殺する者は屢々あるが武保も夫程失望して居るのか」蘭「一通
りの失望じゃありません昨日貴方が歸つた跡で牢の中を見廻りますと武保様は俯向に仕
れて死だ様になつて居る故眠つて居るのかと思へば目を明けて涙を浮べて居ます之は變だ
と搖起しました所、あ、最う助からぬと云ふて飛起しました夫から一時間ほど経て又行て見
たら今度は丸で氣狂の様、室の裡を右と左に歩みながら頭の毛を減利くと搔むしりエ、
残念だ」と涙を流して居ました、此言葉を聞きて眞倉は悲し氣なる太息を突きつゝ大
川に向ひて眞「可愛相に僕が昨日武保の言ふ事を一々嘘にしたから彼れは最う助からぬと
思ひ失望したのだサ早く行て慰めて遣ふ」是にて二人は牢の中に入り見れば武保は片隅の
椅子に倚り眠れる如く目を閉ちてありたるが、二人の足音を聞きて忽ちに起直れり。其容
貌は昨日眞倉が見し時より又一入衰へて宛も幽靈の如くなる故眞倉は憐れみの念を生じて

早くも其傍に進み眞星川君、今日は援兵を連れて來た、サ確り仕たまへ、其様に力を落
す事はない、昨日は僕が悪かつた」武保は極めて力なき調子にて武「イヤ君が悪くはない
僕も其時は立腹したが跡で能く考へれば是が則ち運の盡と云ふ者だ何と考へても僕の言分
は通らぬから此上裁判所へ廻さるれば何うしても放火人殺しの罪は免れない我身は罪はな
くても仕方がない。裁判所で死刑になるよりは自分で最う覺悟をした。君にも色々世話
になつたが今日は是切りで面會を断りませう」と最落着きて答ふるは蘭太郎の言ひたる如
く既に自殺をもなし兼ざる決心なれば眞「ナニ未だ失望する事はない、逃れる工夫がない
でもないから」武「ないでもない第一の親友と頼んだ君までも僕の言立を實と思はぬ程だ
もの、誰れが僕を救ふて呉れやう」此時大川は進み寄り大「イヤ私が救ひます、ハイ私は
初めから此罪人は外にある事を信じ初めから貴方の潔白を疑はぬ、大川萬英でありますか
ら、此頼母しき言葉に武保が顔の色は俄かに晴れ武「貴方が私の潔白を信じて呉れる、イ
ヤ最う一人でも爾思つて呉れる人があれば死でも恨みません、ハイ其様な有難い言葉を聞

くは君が初めて、と嬉しげに嬉べたれど此嬉しさは永く續かず早くも舊時の如く悲しみの相となり武「イヤ、爾仰有つて下さるは有難いが、到底も望みはありません、悲しい事には私の言立には證據がなく、夫も強て探せば出て来るとしても人が信じて呉れません、又信じて呉れた處で私の恥にもなり他人の恥にもなります、詰り何うしても打明ける事の出来ぬ秘密ですから不名譽の身となつて助かるよりは此儘貴方等の辯護を斷りませう」大川は親切なる聲を出し大「イヤ貴方は其様に軽々しく身を捨る事は出来ません貴方には父母もあり親戚朋友もあり其上に未だ」錦嬢もある事を述んとせしに武保は忽ち顔に怒りを現はし武「親戚朋友が何になりませう、此身の盛んで居る頃は兄弟の様に交つた輕糞も今は彼の通りです、眞倉君も私を見捨てました、父母もありますけれど父は私が牢に居る事を聞き悲しいとも思はず、何の用事もない暇な身でありながら知らぬ顔して巴里に居ます、母は澤部町まで來たと聞けど密獄が解けてから一度も面會に参りません、私は詰り親戚朋友に捨られたのであります捨られた自分が自分を捨るに少しも遠慮は要りません」武保

は兒く死を決して此世の思ひを絶ちたる如くなれば大川は道理を解くも耳に入らじと殊更に其心を鑿る如く大「イヤ貴方には錦嬢の愛が通じませぬか嬢を大事と思ひませぬか」此一言は痛く急所に中りしと見え、武保も良久言葉なく頭を垂れしが漸くにして顔を上げ武「イヤ最う嬢には捨られました私が黒戸夫人を愛したと聞ては最う愛想を盡したでせう是も密獄が解けてから逢に來ませぬ」大「イヤ夫が貴方の思ひ違ひです、嬢には黒戸夫人の事を隠してあります、貴方の口から言ふまでは誰も嬢様には云ひません、ですから其様な詰らぬ見を出す者ではありません」と云はれて武保が顔色は稍や解けたれば大川は一段聲を引立て大「貴方が假令ひ首切臺に乗るまでも私は辯護します今貴方が身を捨れば言開きが立ぬから死だのだと思はれます、貴方の汚名は何時までも晴れません」武「夫では何うすれば好いのです」大「辯護さへすれば好いのです、ハイ裁判官と戦ふのです」武「幾等戦つても勝利の見込がありません」大「イヤサ勝利の見込がないから尙ほ奮發して戦ふのです、貴方は昨年戦場に出て御存じでせう、勝利の見込がないからとて戦はぬ先

に腰を抜すのは勇士でありませぬ。昨年の軍も味方は人数が少いから敗るのは初めから分つて居ます、夫でも貴方は戦ひました。死ぬるまでも戦ふのが勇士の本望です、貴方も一旦は此疑を受けたからは首のなくなるまで我身を辯護し、裁判と戦ふだけの決心がなくては了ません、大川が音調は凛々として聞く人の心に徹する如くなれば失望に打萎れし武保も之を聞きて奮發し武「イヤ實に君の言ふ通りだ、私が悪かつた、命の盡るまでは戦ひませう」是にて大川は武保に逢ひたる目的は達したれば是より大川は彼の林町の別荘の様子、當時黒戸夫人が忍び逢たる道筋及び夫人の身姿を初め、英人丸瀬の召使下女の事まで尋ねしに丸瀬には一人の兄あり今は孰れに住むや分らねど其昔し倫敦なるペンソン會社の會計を勤めし人なる由聞たりと告げ、下女は其名を薄木お歌と呼び其父英國里包府にて水夫の酒店を開き居ると言ひし事を思ひ出せし旨を告げたり、是だけの事分れば穿鑿を初むるに充分なりとて猶ほ彼の別荘の鍵の所在を聞き又別荘へ出入りしたる商人の人名録さへ案藏に預けある事を聞き得たれば大川は我が工夫の既に半ば成就したる想ひをなし明日午後の

汽車にて愈々巴里へ向け出發する旨を約して眞倉と共に歸りたり。

方略一旦定まる上は一刻も猶豫すべきに非ず、大川萬英は既に辯護の工夫を定め巧みなる探偵を雇て反對の穿鑿を初むるに決したれば一刻の猶豫もなく次の日の汽車に乗り獨り巴里へ歸りたり。初めは武保の母なる侯爵夫人と共に歸る筈なりしも侯爵夫人は此事件の終るまで山堂家に留まる事と思案を更へたれば斯くは大川一身にて歸りなり。大川は其翌朝巴里に着き停車場にて直に輕便き馬車を借り之れに乗りて先づ星川の本實に行き武保の父侯爵に逢ひて概略の事情を知らせて置き其足にて又も馬車を急がせつ兼て巴里第一等と聞えたる探偵人棟田の家に赴きたり、凡そ探偵と云へる役は他人の目に付き易き人には動まらぬ業にて其顔形ともなるべく見覚えの出來難き人を以て上乘とす、去れど誰でも何所かに癖のある者にて或は色白しとか背低しとか必ず一所は見覚えの附く者なり然るに獨り棟田に限りては實に探偵の爲め特別に注文して製造せしめたる如き人物にて顔にも形にも癖と云ふ者一つもなし孰れの所も皆十人並にして背高からず低からず色白からず黒からず

聲太からす細からす全體の容貌美ならず醜ならず若し強て其人相書を認めんとならば口元尋常、鼻尋常、頭尋常、取留る所一つもなしと書記すの外なからん。

此人の身に驚きて就くべき手柄話数々ありて凡そ今まで佛國にて疑獄と云はれたる疑獄には大抵此人の關係せざる者なき程なり、此人日頃農業を好み巴里の町盡れに廣き田地を求め之に家を構へて野菜菓物何呉れとなく作り設け其手人れをなす事を此上なき樂しみとなせり。大川萬英は今まで一二度此人に逢ひたる事もあれば紹介に及ばず直ちに其家に入り行き主人棟田に會ひて事の由を詳しく話し反對探索の事を頼みしに初めの程は中央警察署に雇はれ居る身を以て私人の頼みに應じ探偵に従事するは職業の許さぬ所なればにや堅く辭みて聞ざりしも一つには此事件の珍らしきと二つには其報酬の非常にて假令ひ免職さるゝも一生不足なく暮される程の薪金なると又三つには大川の雄辯とに心動きて終に此頼みを承諾したり、承諾すれば一分の猶豫なく直様其服を着替へて大川と共に林町へ向け出張したり。到り見れば林町は町と云ふ名はあれど有觸れたる町には非す宛も別に一構へを

なしたる所にて俗に云ふ惣々横町、外の所へ行く人の通り道に立寄りなどする所に非ず惣々此町へ用事のある人ならでは決して來らぬ一區なれば巴里の桃源とも云ふべく靜かなる事此上なし殊に兩側の家々孰れも別荘の如き作りにて表に向ひ店を張る者なく高き塀を以て圍ひたれば町とは云へど塀と塀との間を潜行くが如く、家を見ず人を見ず、人の聲を聞かずと云ふ有様、棟田は此有様を見て棟「コリヤ駄目だ此様な所で何を聞ても到底も分る事ではありません」と云ひたり、武保が別荘は三十二番地と聞きたれば聽て其門札ある家の前に馬車を停め兩人はやをら降立ちしが此家は又桃源中の小桃源門を入りてより低くダラダラと下りて家ある故外より見る時は唯塀のみなるかと思はるゝのみ、大川は此別荘の鍵を受取り來れる者なれば先づ其門を開きて入り見るに邸内の廣き事非常にて葡萄棚あり密柑畑あり、池あり築山あり、菜園あり、農事を樂しむ人には屈強の所なれば棟田は早くも涎を流し棟「コレハ何うも頗るだ三日で好から此様な家を我物にして見度い」と云へ大川は思ふ壺なれば大「イヤ此事件さへ首尾能く行けば此別荘は僕が口を利き屹度君の物

にして進ぜる」と云へば棟田は俄かに其身體の膨れ上る程熱心の度を増したり。

是より先づ玄關を開き下座敷より二階に至るまで残る隈もなく検め見れど悲哉新に造作を仕直せし者にて塵一本も舊時の物はなく武保が言ひし如く證據となるべき者悉く消盡せるにぞ棟田は齒嚙をなし棟「これでは到底此別荘は僕の物にはならぬわエ、壁に一つ爪の痕でもあれば夫を手掛りに其痕を附けた爪の持主を捜し出すのには是では何うも仕方がない責ては髪の毛一筋でも落ては居ないか」と云へど如何とも詮方なし棟「成る程能く此様な不思議な家を捜し當た者だ佛國中に是程忍び逢に都合の好い所はない、是で以ても黒戸夫人の智恵と用心とは分る何時まで捜すも要なければ是より外の事を調べんとて兩人は此家を立出たり、此林町にある家へ總數僅か二十戸位にて其中に教師、幼稚園、馬車屋、鍛冶屋、酒店、料理屋各々一軒宛あるのみ其外は皆物持の別荘なれば残らず聞き廻るも大した事に非ず、先づ最も近き教師の家に至り此隣家に昨年まで如何なる人住居たるやと聞くに更に知らずと答へたれば次に幼稚園に入り其主人に聞くに何でも英人が住居した

るやに思へりと答ふ、其名は丸瀬とは云はざりしやと問返せば名は一向に聞きたる事なしとの答へ、大川は失望の體にて大「困つた者だ」と云ひたるが猶ほ鍛冶屋に聞きし所此鍛冶屋の記憶も同じく頼むに足らねど職業だけに彼の別荘の主人に頼まれ二三度鉦前を作りて持きたる事ありと云ひながら四五年前の得意帳を取出し凡そ二時間ほど繰返したる末あ、是だとして示すを見れば唯丸瀬と記しあり是だけにても先づ一つの手掛りなれば之に少し力を得て次は馬車屋に入行きたり。

一七 牢を逃亡せよと勸告

△馬照町(原名、マテレーン) △探偵原白某(原名、ハラウス)

代言人大川と探偵棟田の兩人は鍛冶屋を出で馬車屋に入り同じ事を繰返して彼の別荘に何人の住居たるやを問ひしに馬車屋は意外にも種々の事を覚え居て大に手掛りを得たり其返答の概略を記さんに三十二番地の別荘には英人住居して三四度も我家の馬車に乗りた

る事あり或る夜天氣の悪かりし時件の英人自ら馬車を頼みに來りしが英人は乗らずして一人の婦人を乗せ之を馬照町まで送り届けたり。其婦人は厚き覆面を被り居て殊には夜の事なれば顔貌は見る由もなかりけれど姿は頗る恰好良き様に見受けたりと云へり。又其英人の年齢より顔苗は如何なりしやと問ひしに其答ふる所武保の年頃容貌と同じ事なれば兩人は大に望みを得たり次に酒屋に到りしが此時既に正午を過たれば先づ此店にて晝飯をなす事に決し一間に通りて主人を呼び前と同じ事を聞き見るに主人は何事をも知らずと答へたれど酒食を運び來れる年の頃十八九なる一人の給仕は三十二番地の英人丸瀬を屢々見受けし事あり殊に丸瀬に使はれ居たる下女薄木お歌には口を開し事も少なからずと云ふに依り棟田は得たりと問を設け棟田シテ其お歌と云ふは何の様な女であつた」給「左様です年は二十四五で恐しく肥太り髪毛の眞赤な女でありました何でもビールが好と見えて冬になると毎夜一盃づゝ買ひに來ましたが或時私に向ひ今の主人ほど勤め易い人はない一年の中別荘へ來るのは丸二月位で其外は折々來るばかり夫で六ヶ敷い用事をさせるではなしお客

と云へば唯だ怪しい貴夫人が忍び來る外にはなく其度に車賃を貰ひお使ひに出るだけで年中遊んで居る様な者だと話しました、又何うかして其貴夫人の顔を見たいと思ふが何か好工夫はあらまいかと云ひましたゆゑ夫は易い事其貴夫人が歸る時コッソリ跡を追けて行けば分ると教えて遣りましたが何うしましたか」此言葉を聞き棟田は喜びて大川が耳に口寄せ棟田「此の鹽梅ではお歌さへ見出せば其貴夫人は必ず分るよ、下女など、云ふ者は總て主人の内幕を知り度がる者ゆゑ必ず何とかして其夫人の顔を見たに違ひない」と云へば大川も大「左様さ僕も爾思ふ」と答へた。棟田は又も給仕に向ひ棟田「其下女は今何處に居るか分らぬか」給「ハイ何でも軍の頃までは居ましたが、其後暇でも取たと見へ何處へか行つて居なくなりました」棟田「では外に誰れか其下女と親くした者はないか」給「ハイあります二十七番館に奉公して居る下女がお歌と姉妹の様にして居ました」是にて棟田は此給仕に小き銀貨二個を與てへ其二十七番館の下女を呼び來らん事を頼みしに給仕は心得て出行きつ暫らくして其下女を連れて歸り來りしかば棟田は慶しき顔をなし色々と問試みしとこ

ろ初めの程は怪しみて充分の返事をせざりしが是もお歌と同じく酒好と見て取てビール一盃を無理に呑せしところ其効忽ち見へべらくと饒舌り初めたり。

其言ふ所は給仕の言ひたる事を少し詳しくせしだけなれど終りに至りて言葉を添へ

下「ハイお歌は妾には何事も隠さず話しました、此英人丸瀬と言ふは其實英人ではなく矢張り佛國人で名前も丸瀬ではないと申しました、何でも何方の奥方を情にして忍び逢ふ爲にあの別荘を持って居るとかで奥方の顔は凄く様に美しくいと申しました、夫から軍の初まる頃暇を貰つて英國へ歸りまして夫切り便りがありません」棟「英國の何所へ歸つた」下「夫は知りません親類とか親とかの許だと言つた様に覺えます」此上は問へども知らずと答ふる故棟田は是にも少しばかりの銀貨を握らせて歸しつゝ其跡にて大川に向ひ棟「未だ是だけては中々裁判官の心を動かす事は出来ないが夫でも先づ星川武保とやらの言立が事實だと言ふ事だけは充分に分つて居る、何でも武保が此別荘で或る立派な夫人に忍び逢つた事と其夫人が非常に用心して本性を隠して居た丈は先づ疑ひもなから事だ、其所で此夫人が果し

て武保の言ふ通り黒戸夫人であるかないかは未だ分らんが併し是も薄木お歌さへ尋ね出せば必ず分る今の女の口振から見ればお歌は何うしても夫人の本性を見届けたに相違ないから大「爾さ僕も爾思ふが夫に附ても之から其お歌を捜し出すのが肝腎だ」棟「イヤ夫には一つ手便がある、僕は是から行って其手續きだけ定めて来るから君は半時間ほど待て居て呉れたまへ」と言置きて棟田は孰れへか出去りしまゝ、凡そ一時間ほど経てど歸り來ず頼て二時間ほど経ち猶ほ影さへも見えざれば大川は待ち兼ねて如何にせば好らんかと獨り心配を初むる所へニコくして歸り來り棟「何うも大川君大層待せた、併し僕は無駄に時間を費やした譯ではない、第一警察長に願ひ一ヶ月の暇を貰ひ次には英國へ遣る適當の探偵を雇ひ入れて來た其探偵は原白と言ふ者で英語は英人よりも能く使ひ殊に小才が利くから屹度旨く遣て来る日當は一日五圓で廿日の間にお歌を連れて來れば別に五百圓の褒美四十日掛れば三百圓に減らすと言ふ約束を極て來た、君夫で好だらうネ、好ければ今夜直に英國へ立たせるが」大川は返事の代りに爲替帳より二百圓の切手を取出し大「サ是が差當り廿日

分の手當だ」として棟田に渡したり。棟田は之を受取りて空たる酒盃に浪々酒を注ぎ一息に呑干しつ棟田サア好し僕は是で別れる、別れて之から黒戸夫人の實家田澤家へ入込み少し探索する事がある、其探索が済み次第、澤部町へ行くから同所で再び君に逢ふ」尤も澤部町へは人の目に附かぬ様に姿を變へて行くから爾思つて居たまへ」大「宜しい承知した」斯く約束を定めて棟田は孰れへか立去りたれば大川も此家を立出たり是にて大川が巴里の用事は全く済みたれば此夜の汽車にて大川は直ちに澤部町へ引返したり。

話替つて大川が巴里へ出發せし後にて武保の母の侯爵夫人は武保に逢ん爲め一度牢屋へ行きたるが其時錦嬢も同道せん事を乞ひたれど若し嬢と共に行きては武保と黒戸夫人の間柄を悟らしめ益々嬢が悲しみを増す事必然なれば侯爵夫人は之を拒み唯單身にて面會を濟したり。之に依り錦嬢は漸く疑ひの心を生じ人々が此頃妾に何事をか隠すが如き様子あるは必定武保が身に危ふき事あるが爲ならん去るにても其の危ふき事とは果して何事なるや」と色々思ひ煩へど素より黒戸夫人と武保の間に大秘密のある事ぞとは思ひ附くべき筈

なければ終には愈々武保が身に逃れ難き罪あるが爲ならんと思ひ詰る事とはなれり。今までは露ほども武信が潔白を疑はざりし嬢なれど今は人々の様子を見て斯く疑ふ事とはなりしなり。去れど愛情は疑ひの爲めに醒めず罪あるを疑ふに連れ、救ひ出さんとする一念益々募れり。是より嬢は一室に籠り直家老人にすら顔を合さず唯一心に武保を救ふべき手便をのみ案じ暮せしが眞に罪ある者ならば罰せらるゝ事必然にして之を救ふは唯逃亡の一つなれば嬢は終に武保に逃亡を進め我身も後より逃亡する事に漸く思ひ定めたり。ア、深窓に人となりて荒き風にも當りし事なき錦嬢我思ふ男を牢より逃し我身も共に亡命せんとは最も大膽なる計略なれど偏に其愛情の切なるが爲めぞかし。

斯く思案を定めたれば嬢は先づ其深意を悟られぬ様態と兩人の叔伯母を誘ひ次の日武保に面會を名として牢屋に至りしが言葉を設けて二人の叔伯母を待合室に待せ置き案内も乞はず唯一人廊下に出で心覺えに武保が牢の方へと進み行くに頓て間近くなりし時牢番の蘭太郎に逢ひしかば其耳に口を寄せ何事かを暫し呟くに蘭太郎は屢々頷首きて嬢を武保の室

に誘ひ行きたり。武保は嬢の姿を見て俄かに顔の色を整へ嬉しけに進み寄りて固く其手を
取り武「オ、能く来て呉れた密獄の解けてから今日は来て呉れるか明日は尋ねて呉れるか
と足音のする度延上つて窓から窺いて居た一併し其方の心配で最う言開きの工夫も略附た
から安心をするが好い」と言へども嬢は既に武保が身に言開きなき事ならんと思ひ定めて
来し者なれば容易には其言葉を信ぜず恨めしけなる色を現はし錦「貴方は何故其様に隠し
ます、此妾に隔てる心がありますか誠を明せば妾が心配するとお思ひでせうが夫は一時の
氣休めと申す者、ナゼ打明ては下さりませぬ」武「イヤ其様な事はない全く言開きの道も
附いて居るので」錦「イエ爾であります皆が妾に隠しても妾は知て居ます貴方は何うし
ても本統の裁判に掛られます」武「ナニ好んば裁判に掛られても立派な言開きがあるから
大抵は放免だ」錦「貴方大抵、放免と思つても若し罰せられたら何うします、後で取返へ
しが附かぬから其様な險呑な事は止めにして外國へお逃げなさい、此意外なる言葉に武保
は驚き武「お逃なさい、何うして其様な事が出来る者か其方を後に残して」錦「イヤ爾

でありません、妾は後から参ります夫に昨日蘭太郎が妻にも手紙を出しお金を與へる約束
で其手續きを定めてあります、日さへ極れば其夜蘭太郎が牢の戸を開きますから外へ出れ
ば馬が待て居て夫に乗船まで行き英國へ渡り英國から名を換へ米國へ移ります、貴方生
れた土地ばかりが國ではありません安樂に世渡りの出来る所が我國です、逃ませう貴方
凡そ男として美人の心を買ふ程樂しきはなし増し武保は獄に下されてより失望の谷底に埋
まる身として斯る嬉しき言葉を聞く其心假令ひ鑽石なりとも何ぞ溶けざる事あらん、武保
は唯宛も綿の如くになりて嬢の前に膝を突き嬢が手を取りて熱き涙を注ぎながら武「嬢よ
有難い、其言葉を聞いた丈で私は殺されても恨まない、爾まで此私を思ふて呉れるとは
一」後は何を言ふやら聞分難き程なれば嬢は既に武保が承知せし者と思ひ徐かに彼が背を
撫で、錦「貴方夫では其日を定ませう」武「其日とは何の日を」錦「逃る日の事ですよ」
武保は曩の日大川に勵まされてより飽くまでも裁判と戦ひて飽くまでも我身に罪なきを辯
護せんと決心せる者なれば此言葉を聞きて忽ちに氣を取直し武「是れはしたり、逃る事は

出来ないよ」錦「何と仰有ります、貴方は妾の願ひを聞ませんか」武「イヤサ逃ては我身に罪のない事を人に知らせる事が出来ぬ」錦「イエ其様な事を言て居る時ではありません、貴方は御身の上の危い事が分りませんか」武「其方は未だ世間に暗いから無理もないが逃ても罪ある者は罰せられるよ缺席裁判と云ふ者があるから」錦「缺席裁判があつても能うございます此國に居さへせねば此國の人が何の様な裁判をしても悲しむには及びません」女がその一念を現はす時には道理などは耳に入る者にあらざるゆゑ、武保は更に言葉を替へ「武」是サ能く聞きナ、逃るのは最易いが今では海底電信と云ふ者があつて逃果せる事は出来ぬ蒸汽船で米國へ行く中には電信の方が先へ行くから船が着く前に米國の警察官が波止場へ来て待て居る上陸するより早く縛られて其日の船で本國へ返される、夫を幸ひに逃れるとしても罪人引渡條約と云ふ者があつて外國に居ても本國に居ると同じ様に險呑だ一分間も心を落附る事は出来ぬ、だから何れ程旨く外國へ逃れた罪人でも終には隠れ切らなくなつて其地の警察へ自首するのだ、幾等逃ても駄目だから其様な事は思ひ切るが好い」

根が伶俐なる少女なれば漸やく武保が言葉を合點せしか玉の如き涙を流し錦「成る程爾聞けば爾でせうが、でも若し罰せられたら何うします」武「幾等罰せられた所が此身に覺えない事だから殺されるまでも言開くのが男の本望だ、罪がなく殺されるれば夫は法律の過ちだから名譽には障らない命よりは名譽が大事だ」錦嬢は初めて我考への足らざりしを後悔し錦「イヤ妾が悪うございました夫では歸つて思ひ直しませう」と云ひながら早や立んとするを武保は暫しと引止め武「逃ける事は何うしても出来ぬが事に由れば他日一時間位此牢屋を抜出ねばならぬかも知れぬ其時は何うか工夫が附くだらうか」錦「何しても抜け出ねばならぬと仰有れば一時間か二時間でも妾が屹度抜出られる工夫を仕ますから何時でも知らせて下さいませ」武「イヤ夫は最う何うしても辯護が立ぬと見て萬止を得ぬ時の事だ其時は頼むから」錦「宜しうございます」斯く約して錦嬢は牢を出て待せ置たる叔伯母と共に我家を指して歸りたり。武保が斯く萬止を得ぬ場合には一時間程此牢を抜出んと言ひたるは深き由縁のある事と後に至りて思ひ知るべし。

一八 胡弓師は探偵棟田

代言人大川は巴里より再び澤部町に歸り來り直家老人を初め醫師關登、辯護人眞倉等に
向ひ巴里にて探偵棟田と共に林町なる武保の別荘を穿鑿せし事の次第を述べ別荘の持主英
人丸瀬とは即ち武保の變名に相違なき事、此別荘にて武保が怪しの貴夫人と忍び逢ひし事
下女薄木お歌を探索の爲め探偵原白を英國に遣せし事等洩れなく語るに人々は其手柄を賞
し大川の骨折を謝するに差も頑固なる眞倉さへ今は武保が言立し事の全く偽りならぬを知
り大川と同じ見込みを抱く事となりたり。去れば此の翌日眞倉と大川は連れ立て獄屋へ行
き眞倉は先づ武保に向ひて眞星川君、何うも君を疑つて面目次第もないが實に大川の骨
折りで君が申立の證據も段々と手掛りが附たので僕も初めて我非を悟り、今日は其詫に來
たのだ』武保は嬉し氣に兩人の手を取り武「イヤ夫は事より有難い、君方が爾骨を折て呉
れるなら僕は最う方は落さぬ死までも我身を辯護するが事の手掛りとは何う云事だ」大川

は是にて前に眞倉等に話したる事を其儘打語れば眞倉は其言葉を受繼ぎて眞星川君、
大川氏の骨折りで先づ三ヶ條だけは確かに分る、第一は君が英人丸瀬と偽名して林町へ別
荘を持つて居た事、第二は君が非常に用心深い或奥方と忍び逢た事、第三は此奥方が一年の
内で僅か一月か二月位其別荘へ忍來た、其月日は丁度黒戸夫人が年々巴里へ行た月日と符
合する事、サア此三ヶ條は既に充分判然とから僕も初めて我過ちを悟つたのだ』大川は其
尾を續け大「夫に下女お歌を探しに遣たらお歌をさへ連れて歸れば黒戸夫人の化の皮を
剥き夫人が則ち星川君の情婦であつたと云ふ證據が立のだ』武保は益々喜び武「其證據さ
へ立てば僕は白州へ引山されずして放免になるだらうか」此問には眞倉も大川も返事し得
ず顔と顔とを見合せしが眞倉は思ひ切つて眞「イヤ爾容易に放免されると思つては當が違
ふよ」と云へば大川も賛成し大「爾さ公判の日は既に差追つて居るし、幾等探偵の手際で
も公判より前に薄木お歌を探し出す事は出来まいテ、武保は又も失望の色を現し武「夫で
はお歌を連れて來るまで公判の日延は出来んか」大「イヤ公判の日延は決して出来ない」

武「日延が出来なければ何う仕やう」眞「仕方がない鬼にも角にも裁判を受けるのサ」證據の揃はぬ中に裁判を受るとは極めて危き事なれば武保は當惑の體にて暫し考へしが思ひ定めたる體にて武「仕方がない其時は黒戸夫人を呼出して對審を願ふと仕やう」大川は眞倉と武保の顔を兩方に眺めながら大「イヤ證據の揃はぬ中は黒戸夫人を呼出す事は出来ない」と、眞倉君さへ初は此事を疑つた程だから何の證據もなく我は黒戸夫人の密夫なりと言た所が誰も信する者はなく反つて自分の罪を重くするばかりだから公判迄に探偵が首尾能く行けば無論夫人を呼出すけれど左もなくば夫人の事は少しも口へ出してはならぬ」武「でも夫人の事を言立るより外に言開きの仕方がない、我身を防ぐには何うしても夫人の罪を露かねばなるまい」太「イヤサ夫人の罪を露いた所が證據のない内は何うしても駄目だから外に言開きの工夫を考へねばならぬ」武「夫では嘘を作つて言立るのか」大「爾サ嘘でも何んでも能い尤もらしい言開きをすれば助かるのだ、黒戸夫人と密通したなど、は誰の耳にも尤らしく聞えぬ故假令ひ事實でも證據の擧る迄は誰も信じて呉れぬ夫よりは

尤もらしい嘘を作り判事と陪審員を言括めて仕舞ふのが徳だ」武「でも嘘を言立る事は出来ないよ」大「嘘を言ふ事が出来ないなら君は最う助からない、何の様な罪人でも嘘を言はぬ者はない、又辯護人でも嘘を言ふのだ、事實を言ひ立てば助からぬ罪人でも嘘を作つて辯護すれば助かるので詰り裁判と云ふ者は嘘の闘ひだ既に判事と檢察官とが君を放火殺人の罪人だと言立るのが第一の嘘、君は決して放火殺人の罪人ではない、所が判事の言ふ嘘には尤もらしい證據あるから、人は夫を誠と思ひ君を本統の罪人と思ふのだ、サア判事が既に嘘を以て罪を定んとすれば此方も嘘を以て其罪を逃れるより仕方がない、證據のない實は證據のまる嘘に負るから判事も嘘を言ひ罪人も嘘を言ふ夫で何方が勝かと言へば詰り嘘の上手な方が勝を得るのだ、夫だから我々も證據のない實を無理に言立るよりは尤もらしい嘘を言ひ立る方が好い。星川君は正直一方に考へるから嘘を言てはならぬと思ふだらうが嘘を言はなきや助からぬから仕方がない、ネエ眞倉君」眞倉は苦笑ひして眞「爾さ、裁判の奥底を打明けて見れば詰り嘘と嘘との戦争さ」大川は之に力を得て一段議論の

鉢を進め大「其處で僕の考へは斯うさ、若し公判前に薄木お歌を連れて来れば無論黒戸夫人の事を言立る、左すれば裁判がグルリと引繰返り、夫人が本統の罪人となつて、星川君は唯だ証人として法廷へ出るだけの事となる。併し薄木お歌は到底も此裁判の間には合ぬから先づ眞倉君と二人で尤もらしい嘘を考へ出、嘘で以て立派に辯護しやう、其嘘が徹て星川君が無罪の宣告になれば此上もないが若し不幸にして我々の嘘が判事の嘘に負け有罪と定まる上は仕方がない黙つて其罪に服すのだ其後で我々は直様黒戸夫人に對し新しい訴へを起すのだ、爾すれば星川君が假令ひ死刑に宣告せられても夫人に對する裁判の落着までは死刑の實行が延る斯して彼れは手間取る中には薄木お歌と云ふ証人が出て来るから有罪の宣告を受けた武保君は再び裁判の仕直しになつて無罪となり、無罪と思つた黒戸夫人が夫殺しの罪で死刑にならうと云ふ者だ今の所では是より外に工夫はない、眞倉君は何と思ふ」眞「僕も外に工夫はないから一ネ星川君、君は兎に角一旦は死刑の宣告までも受ける決心で居給へよ」此恐しい言葉を聞き武保が心は如何ならん唯嘆息を發するのみ

なり眞倉は其心を慰めんと又も言葉を發し眞「イヤ星川君爾失望する事はない、大川君の雄辯で辯護すれば假令ひ嘘でも大概は最初の裁判で助るだらう、死刑の宣告を受けるなどは唯萬一の時の事だ武「夫でも君方の辯護の仕方は實に不安心だ兎に角其最初の裁判に何の様な嘘を言立るか其嘘を聞せて貰ふ」大「イヤ君が夫で可と云へば是から僕と眞倉君とで尤もらしい嘘を作り出すのだ尤も僕は初めて此地へ来た時かれ色々工夫して嘘の大體だけは定めてあるから此上眞倉君の智識と經驗で充分の修正を加へれば尤もらしくなると思ふ先づ聞て呉れ給へとて是より大川は如何なる事を言出るや。

裁判は嘘の闘ひなり檢察官、嘘に巧みなる時は罪なき人を罪に落し、辯護人嘘に巧みなる時は判事を言括めて罪ある人を無罪となす、裁判の勝負は全く嘘の巧拙にあり去れば大川萬英は武保を辯護するにも證據の不充分なる事實を言立んより尤もらしき嘘を作り判事の心を暗ますに如くはなしとの事を述立しに武保は大に其事を嫌ひたれど眞倉は正直なれども其道の人なれば直に大川に同意して眞「成る程充分の證據が揃ふ前に公判が初まるな

らば仕方がない、嘘で以て辯護しやう」と斯く相談定まりたれば大川は我一生の力を盡し充分に考へ置きたる嘘の工夫を述出せり。

抑も此大川の作りたる嘘とは如何なる事なるや愈々裁判の所に至れば自ら分るべければ茲には態と書記さす去れど其大體は一々事實を土臺としたる者にして誰の耳にも偽りとは思はれず殊には彼の武保が犯罪の夜に森を潜りたる一條より手を洗ひたる水に炭の分子浮び居たる事其外判事が是ぞ武保の犯罪の證據なれと頼みに頼む廉々を一々に説破るに足るだけの嘘なれば眞倉も大川の智恵に感心なし眞「イヤ實に君の手際には感服する、是だけ巧く出来れば嘘でも事實より確だ誰でも嘘とは思はぬから此嘘で言開く事にしやう」と云ひながら武保に向ひ眞「宜いかエ今聞く通りの次第だから愈々裁判となつた時はあの通り言立ねば了な小よ、幾等事實だからと證據の揃はぬ中黒戸夫人の事を持出しては何うしても君の負になるから宜いかエ今大川君の作つた嘘を君の口から誠しやかに言立てるのだよ」と云へど武保は進まぬ顔にて武「成る程大川君の嘘は能く出来たが併し僕は心の中で

嘘と云ふ事を知つて夫を誠しやかに言立てる事は出来ない、少しでも嘘と言ふと直に我顔の赤くなる性分だから忽ち判事に見破られる、大川君の雄辯で述立れば誠しやかに聞えるけれど僕の口では何うしても嘘らしく聞える夫にまた公判廷へ出れば心が急くから申程で忘れぬとも云はれぬ夫よりは外に工夫はあるまいか」此言葉に夫川は少し顔の色を赤め

大「イヤ星川君、嘘は嘘でも他人に迷惑を掛けぬ嘘だから少しも心配には及ばぬ、殊には君の命にも拘はる場合ではないか、我身を防ぐには人を殺しても仕方がないとしてあるに嘘を言ふ位は何でもないよ君は死るまでも我身を辯護すると約束しながら是ぐるの嘘が言れぬとは情ないではないか、三つや四つの小兒ではあるまいし、申程で忘れるなどは實に詰らぬ心配だ、我命に掛ると思へば決して忘れはせぬ、若し夫でも忘れるとならば僕が一々書て遣から千遍でも萬遍でも讀返して暗誦したまへ」武保は獨り進まぬ顔にて武「イヤ僕が眞に罪を犯した身ならば嘘を云つても逃れるけれど現在我身に覚えがないのに嘘などを吐くは良心に恥る、假令ひ其嘘で助かつて後で若し嘘と云ふ事が露見した

ら世間に合す顔がないから」武保が言ふ所も萬更の無理にあらねば眞會は其間に立入りて眞夫では君死でも虚の言開きは出来ぬと言ふのか」武「イヤ爾は云はぬ愈々逃れる道のない時には止を得ぬ何の様な虚でも言立やう、併し夫までに出来るだけの工夫を廻らして貰ひたい」眞「でも今は既に此虚より外に言開きの仕方がないじやないか」武保は暫し考へしが武「イヤないでもない、當つて碎けると云ふ事もあるから可か可んか一つ遣て見たい事がある」此言葉聞いて大川は進み出で大「其遣て見たい事と云ふは」武「外でもない黒戸夫人に頼み度と思ふのだ」意外の言葉に兩人は驚き「何を夫人に頼むのだ」武「イヤ夫人は一切の證據が消た事を知つて居ても僕が牢に居るを見て充分の安心は出来ぬに違ひない、若し僕が裁判所で一切の事を言立れば假令ひ其言立が通らぬ迄も兎に角夫人の名譽になり、人の口端に掛るから夫人も夫よりは何うかして僕の口を開かせ度くないと思つて居るだらうテ、僕が手紙を書くから其手紙を持って君方の中誰でも一人が密かに夫人に面會すればあの様な智慧の鋭い夫人だから意外に好い工夫が出るかも知れぬ」大川は暫し

考へて撥と己が膝を叩き大「宜しい僕が黒戸夫人に逢て見やう、到底も君が言ふ通りには行くまいけれど兎に角逢て見れば又意外な工風が浮ぶかも知れぬサ其手紙を認めたまへ」武保は判事より差入を許されたる筆紙を取寄せ匂々と書下すやう！「梅姿女よ（梅姿とは黒戸夫人の名）此人は余が辯護人大川萬英と云ふ者なり余は此人に何事をも打明けたり御身若し余を助くる心あらば余は死すとも彼の事を他言すまじ、梅姿女よ余に罪なきを知る者は世界に御身一人なり、御身は余に罪なきを知りながら余が斯く將に殺されんとするを救はざるや梅姿女よ余が一命は今御身が手の中に在り余を助けよ余を助けよ、御身が名譽今唯余が此舌の先に在る事を記憶して余を助けよ！」大川は此手紙を受け取り大「宜しい僕は明日の中に必ず夫人に面會するから！」斯く言葉を殘して大川は眞倉と共に獄屋を出しが夫より凡そ三四町も歸り來し頃道傍に一人の乞食あり最濁りたる聲にて縁體も分らぬ語を唄ひ、古びたる胡弓を鳴らしながら大川の傍に進みたれば大川は衣囊より一錢の銅貨を取り出し投與へて去らんとするに乞食は大川がコートの裾を引留めて乞「旦那此顔か分

りませんか」と仔細ありけに見上げたり。

大川萬英は執々と乞食の顔を見て忽ち驚き大「イヤ君であつたか、君は先ア何時此地へ来たのだ」乞食「今朝の六時に此地へ着たが早く君に逢たいとて今まで茲に待て居た此様な所では話も出来ぬ、今夜山堂家の裏庭へ忍んで行くから九時を合圖に右手の潜り戸を明けたまへ」と云終りて又も胡弓を取り唄ひながら孰れへか行き去れり、眞倉は此有様を怪しみて眞「大川君全體彼れは何者じや」大「あれは巴里で雇入れた探偵だ」眞「ヤ彼れが探偵の棟田であつたか、棟田なら僕も懇意だが旨く姿を變た者だ」大「夫に今朝此地へ来たと云ふのに山堂家の裏庭まで詳しく案内を知て居るとは實に豪い者だねえ」是にて二人は別れを告げ眞倉は我家、大川は山堂家へと歸りたり、此日裁判所の書記鞭根私に山堂家へ訪來り裁判所にて愈々近々の中武保の公判を開く事に内決せし由を告げしかば人々は今更の如く驚きて生たる心地更になし、獨り大川は益々辯護の期限差迫りたれば一室の中に閉籠りて猶も思案を凝し居たり頓て夜も早や八時過となりたれば大川は錦嬢に向ひ探偵棟

田が今宵裏庭まで忍び來る約束なるを語り潜り戸の鍵を借りて庭先に立出で密かに潜り戸を押し開けば棟田は既に待居りて棟「イヤ今夜君に用事と云ふは外でもないが區長仙田から胡弓師と云ふ鑑札を受けて貰ひたい、色々と詮議をして星川武保が無罪と云ふ事だけは太抵分つたが成る程黒戸夫人は用心が深いと見え是と云ふ證據は一つもない、此上は唯だ英國から薄木お歌の來るを待つのと太々郎とやらの口を開かせる二つの外に工夫はないが太々郎の口は大方開かせる工夫も附たから胡弓師の鑑札が手に入り次第實行する胡弓師の鑑札を得て何をなすや、大川は其由縁を知らざれど直に承諾し大「諾々夫では明日の晩までに受けて置から明夜の九時頃又茲へ」棟「イヤ明晩までは待て居られぬ出來るなら今夜の中にも其鑑札を受けて醫師關登まで送り届けて貰ひ度い」大川は驚きて大「君は關登を知つて居るのか」棟「イヤ未だ知らぬけれど夫で好い、此人へ渡して置けば僕は此人より受取るから」大「シテ鑑札の表へは誰の名を記す」棟「僕の名をイヤ本名では差支へるか棟田を逆さにして田棟と記して貰はう」大「諾心得た」是にて棟田は出去りぬれば大川

も家に入りしが鑑札の事は直家老人に頼むこそ近道なれど直家老人に逢ひて右の次第を打明くるに老人は早速承知なし夜を犯して區長仙田が家に行き頼て鑑札を得て歸りたり。之より大川は棟田の言葉に従ひ一書を添へて此夜の中に其鑑札を關登へ届けつ斯くて其翌朝に至り大川は今日ぞ武保に頼まれし如く、黒戸夫人に面會の日なりと思へば心裡自から安からず智慧過ましき夫人と聞けば如何なる事を云ふも知れず機に臨み變に應じ一言以て夫人が心を撫にするの工夫なくば汚なき後れを取る事あらん去るにても何の紹介もなく此儘行きては面會を得る事難からん、如何にせば可らんかと取つ置つ思案せし末、關登こそ黒戸伯の治療を託され居る醫員なれば彼れを頼まば可らんと漸く思ひ定めぬ、是にて朝飯の終ると共に黒き服を着け黒き帽を頂き姿を正して山堂家を立出づ先づ關登が家に至るに登は朝早く他出せしとて折柄不在の由なれば其歸るを待受けんとて應接の間に入り稍や二十分も待ちたる頃、登は例の如く勢ひ能く人來り 關「イヤ大川君、棟田と云ふ奴は却々の働き者だ、夜前君から正體も分らぬ鑑札を寄越したから譯は知らねど君の手紙にある通り

兎に角も預つて居た所今朝裏町の安泊から客人の中に急病があるとして迎へに來た、行て見ると一人の胡弓師が寢て居たが四邊を見廻して僕に向ひ夜前の鑑札を持って來て呉れたかと問ふ故僕は氣狂ひだナと思ひ黙つて其眼の様子を見ると氣狂らしくもないから變だワイと怪んで居ると胡弓師は笑ひ出し先生最少し氣を利せなきや武保を助ける事は出来ませんぞソレ夜前山堂家から送つて來た胡弓師の鑑札を拙者に渡して下さいと言つて一枚の名札を渡した故見れば兼々君の話に聞いた探偵の棟田であつた、棟田が胡弓師に化けて此地へ入込で居るとは夢にも知らぬ故僕は言葉も出ぬほど驚いたが夫より打解けて色々の事を打合せ今茲へ歸つて來たのだ」大川も棟田の智慧に驚きて大「夫はくーシテ其打合せとは何の様な事であります」 關「イヤ是は棟田に口留をされたから君にも話す事は出来ぬがナニ後程に分る、先づ夫までは隠して置う」大川は推しても問はず是より黒戸夫人に紹介の事を頼みしに登は暫し迷惑相に頭を掻きしが過激醫者とまで紳名さるゝ人なれば忽ち思ひ切り 關「宜しい紹介しやう、全體醫者と病家との交際は一種特別の者で幾等親密でも夫を利

用して人を紹介する事などは職業の許さぬ所であるけれども僕に頼着せぬ我黨共和主義は星川武保を助くるは僕の何より愉快とする所だからサア直に行きませう」とて二人は黒戸伯の住居を指して立出しが、大川果して夫人に面會を得るや否若し面會をせば夫人と大川の對談は如何なるべきや次項を待て説分けん。

一九 雅子の意外な言葉

○黒戸夫人長女雅子(原名マサー)

黒戸夫人が火事の後澤部町に空家を借り所夫と共に引移りたる事は讀者の既に知る所ならん、扱も大川萬英は夫人に面會を請はんとて醫師關登と共に其假屋に至りしが先づ登の差圖に従ひ唯獨り應接の室に入りて待居る中、軽く優かなる足音聞えて徐々と入來る者あれば大川は轟く胸を推鎮めて靜かに其姿を見上ぐるに疑ふべくもなき黒戸夫人なり、頭の毛の少し亂れて顔色の蒼白たるは日夜所夫の看病に癒れたる爲なるべきか、去れど其容貌

は武保より聞きしに違はず口元締り眼涙へ物凄きほど落着きたる中にも云ふに云はれぬ美麗を留め何所ともなく奥ゆかしく見ゆる様は人界の美人とは思はれず、大川若し先に此顔と此姿を見て後に武保の云開きを聞きたらんには眞倉と同じく彼れが言葉を疑ひしならん唯武保が言葉を先に聞きて夫人の容貌を後に見たるは實に武保が身の仕合せなり、去れば大川は夫人の姿を一目見るより早くも武保が身の益々危きを知りぬ。斯る美人を法廷に呼出しては假令ひ我に幾等の證據ありとも證據の力は夫人の美を消すに足らじ、夫人の涙たる眼は百の證據にも優りて能く裁判官を動かすならんと心に一種の恐れを懐きたり。夫人は大川の前に進み寄り最麗しき聲音にて夫「貴方が星川氏の辯護人でありますか」大「左様でございます」夫「醫師關さんに承はれば何事か妾にお話があるとやらで！」大「左様でございます」夫「取込の折ですから直に伺ひませう」大川は茲ぞ大事と心を丹田の底に落着け大「先づ星川武保の情實から申上げます、御存じの通り武保は無實の罪を被せられて明日にも厳しく罰せられる悲い場合に迫つて居まして」夫人は纔に頭を動かし夫「イ

ヤ星川氏が無實であるか其様な事は存じませんが吾所夫伯爵は卑怯な人の暗撃に罹り今は治療の手段も盡き最う一週間も六かしい程になりました」大「でも夫は武保の致した事ではありません、伯爵を狙撃したのは星川武保ではありません」夫人は深く驚きて牙へたる眼を充分に大川の顔に注ぎ夫「夫では誰が狙撃致しました」大川は此時一貴女が狙撃したのですーと言はんとして漸く其言葉をグイと呑込み大「いや奥様、武保が身には云ふ事の出来ぬ秘密があります他人には知さねど辯護人なる私には残らず打明けて仕舞ました」夫人は其意味の移らぬ如く夫「夫が何したと仰有います」大「ハイ武保は秘密を持って居ます、此秘密を打明けさへすれば身の云開きは直に立ます、本統の罪人が直に分りますけれども其秘密と云ふは御存じの通り武保一人の秘密でなく他人の名譽に掛りますから先づ此通り私が内々で御相談に参りました」と言葉の中に針を包み夫人が急所を劫かせど夫人は何の感じなく唯だもどかし氣に夫「イヤ取込の折ですからなるべく手短かに主意だけの御話しを願ひます」と愛想もなく斷られ今は武保の手紙を示すより外なければ大川は衣囊を

探りて大「武保から此手紙を上げて呉れと頼まれました」夫人は靜に受取りて靜かに封を切りたるが眼を其文面に注ぐと齊しく顔に怒りの火焰を現はし毗に朱を注ぎ驟然として起立りつ眼角より大川を屹と睨み夫「此手紙の文句を御存じですか」大「ハイ存じて居ます」夫人は其儘手紙を叩き捨て夫「梅姿とは私の本名で今は所夫か父母の外に此名を呼ぶ事は出来ません、星川氏は何故に妾の本名を呼捨て餘りと云へば一餘り禮儀を知らぬ仕打です」今こそ一歩も譲り難き危急の極點なりと思へば大川は一入聲を靜ませて大「ハイ林町の別荘に居た頃は武保も貴方を呼捨てにし、貴女も武保を呼捨てにしたと申します、其時の事を豈夫お忘れにはなるまいと存じます」夫人は驚きに震へ上り夫「實に無禮一實に失敬一妾は伯爵の妻であります、聞さへも汚らはしい武保は妾との間に其様な秘密がある」と云ひますか」大「確かに左様申します、殊には春邊村の火事の夜も黒戸家の裏口で貴女に忍び逢たと申します、手先の黒く汚れたのも貴女と取交した廿四通の手紙を焼た爲たと申します」此一言には最早や答へもなからんと思ひの外、夫人は威丈高く起上りて金貫

き玉碎くる如き聲を絞りて夫「貴方は此汚らはしき言葉を信じますか斯までも卑劣な人があらうとは思はれませんか人の家を焼き人の所夫を殺す罪は卑劣でも斯くまで卑劣でありません星川氏は潔き婦人の名を漬す穢き罪を犯しますか、彼れ如何なれば斯くまでも執念深く妾が家に寇します、黒戸家の家を焼き黒戸家の主人を殺し猶ほ飽足らず汚れなき妾が名までも汚さんと根もなき事を云ひますか、夫を貴方が誠と思ひ妾が家に來るとは心の底の恐ろしさが分りません」と怒りに任せて我を忘れ言葉鋭く述來る其聲奥の室までも響き渡る程なれば大川も今は得堪ず大「イヤ奥様最少しお靜かに一外までも聞えますから」夫人は大川を眼下に猶其聲を一入張上げ夫「人に聞れて悪いのですか妾は人を恐れません世間の心ある人に聞かせ判断をして貰へば妾の本望です、若し吾所人黒戸伯が日頃の通り達者ならば其儘では聞捨てせん、必らず星川氏に面會して一言の下に彼れを問ひ責め満足の返答をさせますれど妾は弱き女であります頼りにする友達はなく力と思ふ所夫は病み此恐ろしき讒言を退ける力はありません聞かば聞け笑は、笑へ、妾は世間に訴へます」大川は夫

人が息の繼目を待兼て大「でも貴女、武保は決して生涯他言は致さぬと申します」夫「何を他言せぬと云ひますか何故他言を憚ります貴方等の卑劣な了見から織弱き婦人と侮つて何とでもお威しなさい、身に覺えない事を妾は少しも恐れません」大川は生れてより斯くまで痛く云詰られし事なければ殆ど顔に朱を注げど猶ほも堪忍の心を失はず大「奥様能くお考へなさいませ武保は充分の證據を持て居ます退引させぬ證據があります」夫人は益々怒りを現はし夫「何故其證據を裁判所へ持出しませぬ、妾は證據を恐れません、此身に覺えないを力に飽くまでも清き心で卑劣な人と戦ひます、最う聞く事はありませぬゆる證據があらば憚からず裁判所へお出しなさい、妾に遠慮はありません妾は裁判の力を借り事の黒白を定めるのが何よりの願ひであります」と云捨て、跡をも見ず席を蹴立て、奥の間へ退きしかば大川は呼返さんとて大「奥様—奥様—」と呼べど叫べど其甲斐なし、あ、大川今は夢中に夢を見る如く我ながら我身を疑ひ此夫人にして豈夫此罪を犯すことなからん身に其覺えあらんには争で斯くまで大膽なる此の言葉を吐き得んや、争で斯くまで濁り

なき此怒りを發し得んや、扱は武保が云ふ所は悉く眞實には非ざるかと取留もなく迷ひ居たり。

黒戸夫人が退きたる後に大川萬英唯獨り茫然として思ひ惑ふ所へ醫師關登が入來り

關「何うだ夫人との面會は首尾能く行たかネ」大川は此言葉に初めて氣が付き大「あゝ實に不思議、實に分らん、關君此事件は逆も僕の手に合はないよ」關「何を爾失望するのだ、夫人が何か意外な事でも云たのが」大「意外な事にも何も一僕は一言で夫人の心を見破る積りであつたが實に意外、何う考へても分らんよ今の鋭い言葉を君に聞せ度かつた、是では最う何の様な證據があつても駄目だ、夫人が裁判所へ出て彼の美しい顔で今の様な雄辯を揮へば裁判官は夫人を疑はずに證據を疑ふだらうテ、何うも困つた者だ」關登は之を慰め關「イヤ爾失望するには及ばぬ、茲で何を云つても仕方がないから兎に角歸らうではないか」大川は驚きて大「オ、爾じや僕は餘りの事に歸る事までも忘れて居た」是にて二人は互關へ降りしに門の方より夫人の長女雅子とて僅に今年八歳の少女乳母に手を引

れて何れよりか歸り來しにぞ關登は大川の耳に口寄せ關「小供と云ふ者は知て居るだけの事をべら／＼饒舌る者だから僕が一つ問ふて見る」と細語きて雅子が傍に進み其頭上を撫ながら關「オ、嬢様二三日見ぬ間に大きくなつた事、あゝ好お兒になつた此様な好兒だから火事の時に助かつたのだ、ネエ嬢様」雅子は此優しき言葉に乗られて浮々と口を開き雅「先生私はネ火事の前から目が覺て居たのよ」關「夫は感心何うしてお目が覺ました」雅「あのネ妾がネ、あの晩宵から寢て居たの、其間に阿母さんがネ何處へか出て行つて」關登は思はずも此時嬉しさに大川と目配せしたり關「はてナ阿母さんが出て行て夫から」雅「夫からネ又歸つて來たの妾は其時眠つて居たけれど阿母さんが密と戸を開けて歸つて來たから又目が覺めたの、夫からネ寢床の中から見ると阿母さんはホロ／＼涙を流して居たのよ阿母さんの癖に泣くなんて可笑い事ねえ」關と大川は非常の手掛を得たる思ひをなし心の中では「是で夫人の罪が分るのだ何でも夫人は武保に逢ひ手紙を焼て歸つて來て是から愈々所夫を殺さうとて獨り涙を流して居たのだナ」と同じ思ひを浮べたり、關は

又も雅子に向ひ 關「夫から阿母さんは又出て行たのだからうき」 雅「イエ夫切りで妹の傍へ座つてネ、泣て其顔を眺めて居たの其時ネ表の庭でドーンと鐵砲の音がして恐ろしかった事」 嗚呼若し雅子の云ふ如く夫人が季の娘の傍に居る時鐵砲の音を聞きしとならば其鐵砲は夫人の射たる者に非ず伯爵を狙撃せしは誰か外の人ならん、關は茲ぞ大事の所と思へば又も問返し 關「あれ嬢様があんな様な嘘を仰有る、鐵砲の鳴つた時阿母さんは外へ出てお妹子の傍には居なかつたのでせう」 雅子は蹶起となり 雅「先生嘘じやありませんよ、鐵砲の鳴つた時阿母さんは吃驚して立上り、オヤ今の音は—と云てウロ／＼して居たの、其時又二度目の鐵砲が聞えたの、爾してネ薪の燃る様な音がバチ／＼聞えてネ阿母様はオヤ大變だつて其儘表の方へ駈て行たの、此言葉の通りならば黒戸伯を殺せし者は愈々黒戸夫人に非ず、黒戸夫人に非ざれば誰なるや誠に疑はしき次第にこそ關登は猶ほ合點行かされば眉を蹙めながら 關「あ、嬢様は夢を見たのじや其様な夢を見たのでせう」 雅「イエ夢じやないのよ」 傍にありたる乳母も口を添へ 乳「イエ嬢様の仰有るのは本統ですよ、あの晩私

も鐵砲の音に目が覺め、何事かと窓から首を出して見ると又も二度目の砲が聞えました其時奥様は戸を開けて表の方へ走り出ました、何でも奥様も大層驚いて被爲在た様子ですよ」 雅子も其言葉を聞き 雅「夢じやない事よ、夫から煙りが一杯遣入て来たから妾は阿母さん／＼と泣て居たの、爾すると太々郎が飛で来て妾と妹を掴む様に外へ連れ出して呉たのヨ」 此時家の中にて「雅や／＼」と呼聲の聞えれば雅子は耳をそばだて 雅「アレ家で阿母さんが呼で居ます、先生失敬」と云ひ捨て其儘乳母に手を引れ奥の方へと入り行きたれば餘りの事に大川も關登も心の搔亂る、程に打驚き躊躇く如くに門の外へ立出しが大川は最着白たる顔にて關を眺め 大「全體何う云ふ譯だらう」 關「爾サ實に不思議だよ、益々分らなくなつて来たなう」 大「眞逆夫人があの子供に云含めてあの様な事を云せる譯でもあるまいし」 關「爾とも幾等夫人が賢いとてあの七つや八つの子供に教へ込む事は出来ないよ、教へ込むのは益々險呑なもの」 大「夫に教へ込んだ所が子供で其教へられた通り出来る者じやなしサ何うしても今雅子の云つた事は實に違ひない、黒戸伯を殺したのは

夫人の仕業ではないと云ねばならぬ」是にて二人が心は益々迷ひの雲に銷されたり。今までは夫人の仕業とのみ思ひ居たる者今は夫人に非ずと分りたり。

抑も此の犯罪は夫人か武保か兩人の中必ず一人の仕業なれば今夫人にあらぬ事分る上は武保の仕業に極りたり。武保果して罪人なるか大川も關も心に一樣の疑ひを抱けど口には發し得ざる如く溜息を發するのみにて漸く關登の家まで歸り來り關「サア最う茲へ來れば誰も聞く者はない、遠慮なく君の思惑を述べたまへ」大「實に斯なると人の心が恐しい、成る程夫人ではあるまいよ身に覺えがあるならば幾等賢夫人でも先刻の様な大膽な言葉は出ないテ」關「ウム夫人でないとすれば君は又武保を疑ふのか」大川は茲に至りて一言の返事もなく唯首を垂て考へ居たるが漸やくにして最も悲しき顔を上げ大「ウム事に依ると武保が怪しいわへ、爾だ何うも武保だ、今まで一圖に夫人とばかり思ひ込み武保が怪しい所が見えなんだが斯うなつて見ると武保に怪しい所がある判事も誰も未だ其處までは氣が附ぬのか」關登は怪しみて關「夫では別に何か武保に怪しい廉が出来たのか」大「何う

も怪しい先づ僕の考へを聞き給へ」とて是より大川が説出す意外の言葉は猶長き故欠回に譲る。

二〇 僞 癡 痴

大川萬英は嘆息しながら言葉をつゞけ大「能く考へれば武保が怪しいテ、僕の考へではあの夜武保が黒戸夫人に忍び逢ひ手紙を焼捨てたのは事實だ、夫であの夜は非常に風が吹て居たと云ふ又其風は丁度星川村から黒戸家の方へ吹附る様な方角であつたと云ふから此風が即ち犯罪の原因だ、先づ二人で手紙を焼て居る中に紙の切か木の切れが燃え上り其風に吹飛され積である薪の上へ落たのだ、二人は爾とも知らず手紙を焼て仕舞ひ内と外へと立別れたが其中に藁の上の火が段々と燃出したのだ。武保は暫らく來て振返つて見ると其火の先が見えたから是大變だと思ひ引返して其火を揉消して居る中に火は風の爲に段々と廣がり薪へ迄も燃移つて庭一面を照らす様になつた。其處へ黒戸伯が何事かと怪しんで出

て来たのだ、其所で武保は喫驚し、サア黒戸伯に先程よりの事を見られたか、是では到底も逃れる事は出来ぬ、錦嬢との婚禮も是で破れ身は罪人となつて此儘捕へられ此世の望みも盡果たのかと一時に心が急込んだから兎角の思案にも及ばず其儘鐵砲を取り狙つて撃て逃たのだ、是は最う武保には限らぬ誰でも自分の犯罪を見認められた爲め我心を取亂し其場で直様其見認た人を射殺すは能くある事だ詰り云へば一時に逆上込んでする業で日頃幾等正直でも此罪ばかりは犯さぬとは云はれない、果して此通りとすれば鐵砲の鳴つた時夫人が娘の傍に居たのも怪しくない、殊に先刻の夫人の口振では夫人も眞實武保を罪人と思ひ込で居る夫に未だ一つの證據と云ふは黒戸伯の陳述だ、あの火事の夜黒戸伯が判事輕袋に答へし言葉に「薪の後から一人の男が走り出で庭を横切つて畑の方へ行つた」と云つてある、して見れば此罪人は女ではなく男でなければならぬ、夫人ではなく武保である、サア此通り切迫詰つて止を得ず犯した罪だから鐵砲にも散彈が込つて居たのだ若し前以て殺す計みがあれば何うしても散彈を用ゆる筈はないが唯だ初めから込てあつた儘の鐵砲を其

場に至つて其儘使つた者だから是まで例のない散彈の人殺しとなつたのだ—實に困つた事になつて来たわへ」此説明しを聞き左しもの過激醫者も顔色を青くし其聲を潜めて「イヤ爾聞けば誰でも武保を罪人と思ふがア、實に恐しい、大川君其事は決して他人に話し給ふな、若し裁判官の耳にでも入れば取返しが附かぬよ」大「素より他人には決して話さぬが併し是で僕の辯護は益々六ヶしくなつて来る、今までは充分に武保を無罪と信じたから假令嘘を言立るにしても氣が強かつたが、斯自分の心に疑ひが起つては實に眞倉の云ふ通り思ひ切つた辯護は出来ないテ、あ、困つた者だ—」二人は是にて失望の淵に沈み唯だ首を垂れて空しく心を悩ますのみ凡そ十分間程何の言葉もなかりしが、忽ちにして二人齊しく顔を揚げ、光る眼を見合せたり、是二人とも何か心に一種の逃道を見出したるに由る者なり、關登先づ口を開き「關「大川君」大「何だ」關「イヤ成程今の説明は尤もらしく思はれるが未だ是だけで直に武保を罪人とは云れぬぜ」大「左様サ僕も今不圖其様な氣がして来た—直接の犯罪と間接の犯罪と云ふ者があるから」關登は撥と手を打ち「其所サ、僕

も爾思ふのだから成る程黒戸夫人が自分で直接に此罪を犯しはせぬが間接に犯したかも知れぬ
即ち人の手を借り其人に所夫を狙ひ撃にさせたかも知れぬよ」大「爾よ、あの太々郎に云
含めてヨ」關は思はず聲を高くし「關は是は奇妙、君の考へと僕の思惑と寸分違はぬ、爾さ
太々郎く、太々郎と云ふ奴は馬鹿でなくて痴頑だから夫人に頼まれさへすれば充分是位
の罪は犯すよ、僕の考へでは先づ夫人はあの夜武保に逢ふ前に充分の工夫を定め委細太々
郎に云含めて薪の影へ忍ばせて置たのだ」大「爾サ夫で武保と旨く話しが纏まれば太々郎
は其儘鐵砲を納め何食ぬ顔で止て仕舞ひ若し又武保と話しが破れる時は太々郎は薪に火を
附け伯爵を誘き出して直様射殺すと云ふ一切の合圖を定めて置たのだ」關「爾々夫で愈々
話しが破れたから夫人は直ぐ太々郎に合圖して何となく家の中へ引込で待て居たのだ」

大「爾とも夫で太々郎は其合圖を合點して件の通り遣つたのだ」關「だから武保は矢張
り罪人でないと云ふ者だ」二人の考へ寸分の違ひもなき故初めて兩人は息を吐きしが此考
へ果して當るや否誠に覺束なき次第なり大「サア新なれば何より太々郎の口を開かすのが

肝腎だ」關「其事サ、僕も色々工夫して既に探偵棟田と打合せた事があるから今に棟田
が来るだらう」此時襖の外より下部の聲として「旦那様只今憲兵が一人の癲癩病を連れ共
立慈善病院へ入れて貰ひたいとて玄關へ參つて居ます」關登はうれし氣なる聲にて「關「其
憲兵を直に茲へ通せ」と命じたり、暫らくして憲兵何某一人の癲癩病を抱ながら人來り、
憲「先生此癲癩病は御覽の通り胡弓師で公園の外に倒れて居ました、若し鑑札のない乞食
なら直様巡査に引渡す積りでしたが、コレ此通り棟田と云ふ鑑札を持って居るゆゑ乞食同様
の取扱ひも出来ませす厄介ながら連れて來ました」關は心の喜びを無理に押隠し、エ、面倒
臭い」と云ふ如き面持にて「關「イヤ仕方がありません氣の附くまで其處等へ寝かして置て
貰ひませう、氣が附けば病院へ送りますから」憲兵は是にて退きしが、この癲癩病人は讀
者の既に知る如く探偵の棟田なり、太々郎と同じ病院の同じ癲癩病室に入らんが爲め今朝
ほど安泊りにて關登と打合せ斯く憲兵を謀計に掛けたるなりき。棟田は憲兵の退きたるを
見澄まし笑を含んで起直り口の廻りの泡を拭取り口中より泡吹機械を取捨て、棟「ア、林

町の別荘を我物にするには却々骨が折れます、探偵で偽癲癩を使つたのは恐らく僕が初め
てだらう』是にて大川と關は棟田を慰め猶ほ後々の事を打合せたる上にて棟田を共立病
院に送り太々郎と同じ病室へ閉込めたり、之より棟田の力に依り太々郎果して口を開くや
否若し開くとせば如何なる事を云出すべきか、又其云ふ所果して裁判の間に合ふや否、其
外之れに類する一切の問題は後に至りて自ら判断すべし。

大川萬英は探偵棟田が首尾能く病院に送られたるを見届けて醫師關登に別れを告げ其足
にて直様獄屋へ行き武保に逢ひて彼の黒戸夫人に面會せし事の次第を告げ、夫人が言葉
一句も違へずありし儘を説聞せば武保聞終りて赫と怒り武夫は失敬な夫人だ證據が消た
と安心して其様な大言を吐くとは愈々最う僕を罪に落す決心と見える一エ、残念一實に
實に不埒な奴』と齒を嚙鳴して憤喝しが又も氣を取直し武『イヤ僕が悪かつた、あの夫人
の度胸では夫位の事は云ひ兼ね、夫を一本の手紙で白狀すると思つたは僕の過り、好々此
上は直々夫人に面會して痛い目に逢して遣る、爾だ顔と顔を突合せて充分に云懲せば眞

逆に其様な嘘々しい事は能う言んテ』と云ひながら大川に向ひ武『大川君、君は何と思ふ
かも知れぬが僕は何うしても此牢を忍び出で直々夫人に面會する、君何うか僕が一生の願
だから見ぬ振で居て呉れ給へ、幾等彼の夫人でも僕と顔さへ合せば君に云た様な横着な事
は能う云はんから僕は一言で夫人の奸智を挫いて来る、若し夫でも行かぬ時はそりや最う
僕の運の盡ゆる斷念して何とでも君の思ふ様にして貰う、エ大川君、是ばかりは何うか黙
つて許して呉れ給へ』今武保を黒戸夫人に逢せては如何なる椿事を起すも知れねば大川は
強て制止たれど武保今は死物狂ひとなり聞入る、様子なきにぞ遂に逆ふことを得ず大『夫
では仕方がない僕は見ぬ振をして居やうから能く注意して遣なら遣て見給へ』と漸く承諾
して歸り去れり。あ、武保は獄屋の中に鎖さる、身なるに如何にして夫人に面會すべきや
如何にして此牢を潜り出でべきや是亦一つの困難なり。去れど兼てより萬止を得ぬ時は自
ら夫人に面會せんと種々考へ置きたる事なれば大川が歸りし跡にて直様錦嬢に宛て『嬢
よ大事の用事あり直様面會に来れ』との短かき手紙を出したるに嬢は何事なるかと取る物

も取敢へず飛ぶが如くに來りしゆゑ、武保は聲を潜め武「コレ嬢、先日其方が茲に來て逃亡を勧めた時、私は逃亡は出來ねど事に由れば暫しの間此牢を抜出ねばならぬかも知れぬ」と話したが其方は覺えて居るだらうネ」錦「ハイ能く覺えて居ます」武「夫では達て頼みがある、暫し此牢を抜出る様蘭太郎に頼んでお呉れ、何さ抜出た切りで逃して仕舞ひはせぬ四時間か五時間経ば直に又歸つて來るから一夫も今夜と云つては出來まいから明日の晩で好い」錦嬢は武保を愛するの餘り其仔細さへ問糺さず早速に承諾し直に蘭太郎を呼び來れり、武保は之に向ひ明夜宵の程より十二時まで密かに外へ出て呉れ、と頼みしに蘭太郎勿體を附けんとてか殊更に眉を顰め蘭「其様な事は到底も出來ますまい」武「でも先日逃して遣ると約束したではないか」蘭「イヤ夫がさ、逃して上るのは譯もないが宵に逃して夜中に歸つて來るとは出來る事ではありません逃切りに逃る者は幾等もあれど、三四時間経て歸つて來るのは今まで聞いた事ありません、若し貴方の出た後で誰か來て武保は何うしたと問はれたら何と言開きます、サア牢番が罪人を逃すのは自分の粗忽ですから免職だけで濟

みますが少しの間抜出させ再び歸つて來たとあつては粗忽だけで濟しません、頼まれてしたと云ふ事が分るから連類と見做れて私までも牢の中へ入られます」武「夫では何しても出來ぬと云ふのか」蘭「イヤ出來ぬ譯でもありませんが一先ア、六かしい事柄で」と暖味の返事なるは猶も金銀を食ほり取らんと計みぞと思へど金銀を惜びべき時にあらねば錦嬢より又若干の金貨を與ふる事を約せしに蘭太郎は打て變り蘭「ハイ出來るは出來ますが、この頃は私が内番で門番は外の者が務めますゆゑ門から出る事は出來ません左様斯うしませう堀の薄い所を切破り、夫から忍び出る事に一明日私かに鶴嘴を上げますから夫で貴方が切破れば堀の薄い所も教えて上ます、武保は暫し考へ武「ウム堀を切破つて一イヤ翌日になれば其穴を見咎られるだらう其時は何と言譯をする 蘭「左様さ、眞逆鼠が喰開たとも云はれませんか一ナニ宜しい夫には又工夫があります、貴方が外の囚人を一人連れて逃るのです爾すれば其囚人は二度と歸りませんから其者に罪を負せ其者が切破つた様に胡魔化します」と最と賢けに説立るは是まで既に其例のある事なるべし武「夫は旨い

工夫だ、併し外の囚人とは誰だ。蘭夫は鶴之助に限り、彼奴は元一人前の人足ですが、放蕩に身を持崩し破戸漢の群に入り職業もなく轉つて居た罪で此獄屋へ入れたので其後牢番が足りぬ所から彼れの力の強いを見込んであの通り番人に使つて居るので、それから彼れに少しの金を遣れば喜んで逃出します。武「夫では爾云ふ事に頼まう」と漸く相談纏まりて蘭太郎は出去り、跡に錦嬢は武保に打向ひ。錦「ですが、貴方は明晩忍び出で何をなされます」と問掛けたり、抑も黒戸夫人の事は素より錦嬢に知らせてならぬ秘密にして、是まで堅く秘しある事なれば判事の厳しき尋問には笑つて答へし武保なれど錦嬢の此優しき問ひには思はず顔色を變へて震へ上り。錦「エ、貴方忍び出で何所へ入らつしやるのです」。武「ナニ何所つて、あの夫れなにサ、エ、面倒臭い後で知せやう歸つて来た跡で」。此曖昧千萬なる返事に錦嬢は聲を震はせ。錦「妾は知て居ますよ、皆が妾に秘して居ますけれど妾には虫が知らせます。貴方は女の所へ行るのであります」。武保は拜まぬばかりに。武「コレ嬢、其様な事を云はずにコレ頼む」。錦「イエ、知つて居るから好ごさいます。貴方は

外に愛する女があるのです。貴方は妾を道具に使ひ明晩逢に行くのです。貴方一人其女が眞實貴方を愛するなら何故妾の様に斯うして貴方を救ひに参りません、貴方が眞實の罪を受けて牢の中に居るのを知りながら救ひに来ぬとは餘り不實な女ではありませんか、武保も今は堪え兼ね。武「イヤ、嬢嬢ではない聞いて呉れ」。錦「イエ、聞くには及びませんが、妾は貴方を信じます、貴方が逢はねばならぬと思召すなら幾度でも逢して上ります」。斯く錦嬢に疑はるは武保が身に取りて裁判官に無實の疑ひを受くるより猶ほ辛き所なれば今は一切の事を打明くる外はなしと思ひ定めて其手を取り。武「私が悪かつた許して呉れ」。錦「イエ、許す事はありません、貴方のお心は妾の心ですから、貴方が善いと思召してなされる事は妾も善いと思ふて居ます。決して留めは致しません」と言ひながら立上り早や歸り去らんとするにぞ武保は周章して引留めんとすれど其時既に遅し。嬢が妾は廊下を曲りて見えすなれり。跡に武保は拳を握り。武「エ、此様な疑ひを受くるのもあの黒戸夫人の爲だ。返すくも夫人が恨みだ。見よ此儘に置く者かと口惜さの涙を流したり。

二 誰れの業か

武保は黒戸夫人に面會して其奸智を挫き犯罪の原を露かん爲め獄屋を忍び出る事に決心せり去れど一人忍び出ては後にて疑はる、原なれば鶴之助を唆かし之と共に抜出んとて彼れが来るを待ち居たるに此夜の十時に至り鶴之助廻り来れば私に之を呼入れて明夜斯々の手續きにて共に此内に逃出さん汝吾に力を借さずやと打明けて頼みたるに鶴之助は聞終りて首を振り鶴「イヤ私は御免蒙むりませう、未だ當分は此獄屋に居る積りですから」思ひの外なる此返事に武保暫し驚きしが今鶴之助の力を借らずば折角の決心も果す事を得ず残念此上なき次第なれば武「ナニ當分此内に居るとナ、夫は馬鹿正直と云ふ者だ」鶴「だつて貴方牢にさへ居れば三度の飯にも不自由をせず夜は暖かな寢床に寢て是と云ふ仕事はなし、折々斯うして見廻りさへすれば内々一錢二錢の貰ひがあつて煙草も喫めるし酒も飲めます、此の様な好い所はありませんヤ」武「でも自由に外へ出歩く事が出来ぬではない

か」鶴「何の貴方私は別に大した罪を犯したと云ふではなく唯だ無商賣で轉附て居た爲め捕はれたので重い處刑は受けません悪く行つても警察署へ引出され三月か四月の留置です留置位は今まで何度も覺へがあります、ナニ恐れるには及びません、今若し私かに逃出すと直様憲兵に追掛られ捕まつて引戻されそれこそ痛い目に合されます、何しろ牢を破るは重い罪ですからな警察署の留置位では濟ませんや、何うしても裁判所へ引渡され本統の處刑になりますから是ほど馬鹿氣た事はありますまい」斯く事の道理を辨へたる者を如何にせば我同類に引込むべきや、武保は困じ果たれど猶も言葉を構へて武「ナアニ憲兵が能く捕へる者か」鶴「何うして貴方幾等隠れても憲兵にや叶ひません、夫に又盲く逃延た所が仕方がない、是が春とでも云ふのなら又格別だが今は生憎秋ですから段々と冬になり人足の仕事もなくなりませう」武「ナニ今は秋だから段々と葡萄酒の仕事が初まり、お前達には金儲けが幾等でも出来るではないか」鶴「葡萄酒の仕事は貴方二週間しか續きません、其中には冬になり雪も降れば水も凍る、冬には最う懲々です、茲に居れば暖爐もあり衣類も

あり少々せうじゆの寒ひやさは平氣へいけいですが外そとへ出でては最もう衣類いれいを着きるにも錢ぜにが要いるから私達わたくしの様な一文いちもんなしには何なにうして辛抱しんぱうが出来できますものか」茲こゝぞ武保ぶほが思おもふ壺つぼなれば武ぶ「ナニ錢ぜにが要いるつて錢ぜになら己おれが幾等いくらでも持もつて居ゐる」鶴つる「サ貴方あなたはお持もつても私は積かねば出来できません」武ぶ「ナニサ己おれと一緒に逃にげ出して呉くれさへすれば錢ぜには幾等いくらでも遣やると云いふ事ことよ」此こゝ有ある難がたき言葉ことばに鶴つる之助のすけは半なかば喜よろこび半なかば疑いふ面持おもてにて暫しばし武保ぶほの顔かほを眺ながめしが一段いちだん聲こゑを低ひくくして鶴つる「貴方あなた本統ほんとうですか」武ぶ「本統ほんとうとも嘘うそを云いふ者ものか」鶴つる「でも貴方あなた今いまから春はるになるまで五月ごがつは掛かりますが一月いちがつ樂々らくらくと暮くすには何なにうしても十圓じゅうげん要いますぜー五月ごがつで五十圓ごじゅうげんなくては足たりりません」武ぶ「好よいとも其積そのつりて百圓ひゃくげん遣やるワ」百圓ひゃくげんの聲こゑに鶴つる之助のすけは眼まなこに喜よろこびの色いろを躍をどらせ頬ほの肉にくの高たかくなるほど笑わらたるが又また疑いひの聲こゑを潜ひそめ鶴つる「旦那だんな、御冗談ごじやうだんじやアありますまいナ」武保ぶほは囊ふくろに密獄みつごくを解かけてより種々しゆしゆの差人物さじんぶつを許ゆるされ衣類いれい金錢きんせんさへ取寄とり寄よせてある事ことなれば武ぶ「ナニ冗談じやうだんを言いふ者ものか—論ろんより證據しやうこだ」と云いひながら傍かたに疊たたみある衣服いふくを取り其衣囊そのいぶくを探たづね多おほくの紙幣しへいを取とり出し武ぶ「ソレ是これが百圓ひゃくげん餘ありある、約束やくそくの證據しやうこに之これを遣やらう」鶴つる之助のすけは三拜さんぱい九拜くぱいして押頂おしただき

鶴つる「是こゝへあれば私わたくしの身みは今いまから貴方あなたの自由じゆうです」と雀躍せきやくしつゝ喜よろこびつゝ、是こゝより猶なほほも明あ晩ばんの手續てつづきを打合うちあはせて十二時じふにじ過する頃ころ鶴つる之助のすけは別わかれ去さりしが斯かくくて其翌日そのあつじつとなれば牢番らうばんの蘭らん太郎たろう約束やくそくの如ごとく私わたくしに鶴嘴つるはし二挺ふたとを持もつて是保たけがかりに渡わたし又堀またほりの内うちにて最もも切破きりやぶるに都合つがひよき所ところをさへ指示しゆしし猶なほも様々さまざまの用心よじんを教おしえたり、頓とんて夜よの八時はつじ頃ころとなり鶴つる之助のすけは仕度したくを調たへて忍しのび來きたり鶴つる「旦那だんな、萬々ばんばん都合つがひ能よく行いきました」蘭らん太郎たろうも心配しんぱいして内番うちばんの人々ひとびとを殘のこらず呼寄よびよせ先程さきほどから小宴せうえんを初はじめて居ゐます、夫それに當直たうちやくの醫者いしやまでも蘭太郎らんたろうに招まねかれて行いきましたから誰たれも氣きを附つて居ゐる者ものはありません「サア行いきませう」武保ぶほは衣服いふくを着き替かへ鶴つる之助のすけと共に牢らうを出いしが彼の切破きりやぶる所ところと云いふは堀ほりに添そひたる二個ふたこゝの物見臺ものみだいの間まなり、二人ふたりは鶴嘴つるはしを振ふ上げて丁々ちやうちやうと切きり初はじむるに此壁このへい何百年なんねんを経へたる者ものにや煉瓦れんがと煉瓦れんがの間に介ままりたるセメントセメントさへも石いしよりも堅かたく固かたりたる程ほどなれば武保ぶほの力ちからは何なんの甲斐かひもなく假令たとひ朝あまで掘ほりたりとて穴あなの開あく事こと覺おぼえなければ幸さいひに鶴つる之助のすけは剛力がうりきなる上斯かる事ことに慣なれし身みなれば必死ひつしを極まめて凡およそ一時間じつかんほど堀ほる内に漸やや直徑しやくけい一尺餘いっしやくありの穴あなを穿うち得えたり。鶴つる之助のすけ先外せんがいを窺のぞき鶴つる「上

首尾く、外には林があつて往來を離れて居るから誰も知る氣遣はありません、旦那貴方は右へお逃なさい、私は左りへ行きますから、是にて鶴之助先に潜り出で武保も續いて出たるが二人は宛も言合せし如く木の最も厚く繁りたる所へ我知らず馳入りたり。武保は鶴之助に向ひ「武」ア、有難かつた、お前のお蔭で斯なつたのだから若し己が放免になつた時は充分の禮をする今宵は是で別れよう」と細語ながら別れを告げ右の方角へ走去れり。鶴之助は其後影を見送りにて鶴ハテ奇妙だ、あの人は何處へ行く積りだらう、好々跡を追けて見届けて遣らう」と云ひつゝ、密かに武保が後に從ひ行きけり。

武保は獄屋を忍び出てより成るべく人通りの少き道を選び帽子を目深に冠りつゝ、只走り急ぎて夜の九時半に近き頃黒戸伯夫人の假居に着きたれば靜に入口の戸を叩くに聲に應じて取次の下女内より其戸を開きたり。武夫人は御在宅ですか。下女「ハイ奥様はお宅ですが旦那が病氣危篤のる誰にも面會は致しません」武「イヤ是非逢ねばならぬ用事があつて」女「何の様な御用事でも面會は出来ません」武保は一策を案じ武「イヤ拙者は輕装

判事の命を受け裁判所から参つた者だが、星川武保の犯罪事件に付き少しお尋ね申度い事があるから兎に其角旨を取次で貰はう」女「オヤ裁判所から先ア爾とも知らず失禮を致しましたサア此方へお通り下さいまし」と云ひつゝ、先に立て入行くにぞ、武保は其背後に從ひ奥深く進み行けば下女は應接所と覺しき一室の戸を開き女「暫し是にてお待ち願ひます」と言置きて退きたり。武保は中に入りて其室の様子を見るに卓子の廻りに黒く燻りたる椅子三脚ばかり並べあるは是れ火事の中より取出せしを取敢ず茲に並べたるに、未だ手入などの暇を得ざる者なるべし。室は廣けれど突當りの壁を半ば開きたる一つの窓あるのみ今入りたる戸口の外には出入るべき所なきゆゑ若し夫人が我姿に驚きて逃出す事もあらば此戸を塞ぐに如くはなしと自ら入口の戸を斜にし身を其影に隠して待ち居る中頼て夫人は徐々と入來れり、入來りて四邊を見れど人影更らにあらざれば低き聲にて夫「おや此室ではなかつたのか知らん」と云ひながら早出去らんとするに由り、武保は戸の影より身を躍らせて飛出たり。日頃は落着きたる夫人なれど之には痛く肝を消し「アレー」と叫んで思はず

も逃出さんとす、武保は其前に立塞がり、武「逃ても駄目だ、逃れば所夫の室へまでも追詰て行く」夫人の驚きは猶ほ鎮まらず、夫「オヤ武保！お前は茲へ」と切々の聲を發したり、武保は怒れる眼を見開きて言葉使ひさへ荒々しく、武「コレ女、手前はナ此己を獄屋に押入れ最う安心と思つた、らうが爾は行かぬ、獄屋は罪ある者を入れる所自分で罪を犯しながら證據の消えたを幸ひに罪なき己を牢に入れ自分が外で暮さうとは餘り心が太過る、最う逃やうとて逃さぬからサア性根を定めて茲へ座れ」と云ひながら夫人を捕へて椅子の上へ押据る、其振舞と其顔貌の凄じき事言はんばかりもなければ麗しき夫人の顔も言ふに謂はれぬ驚きと恐れを現はし、夫「是は怪しからん」武「何が怪しからん」夫「人の家を焼き人の所夫を殺した癖に」武「手前の口から此己を人殺しの放火のと能くも先ア其様な虚々しい事が云はれた者だ」夫人は此一言に氣を取直し驟然起て武保が頭上より耳を貫く鋭き聲にて、夫「虚々しいとは汝が事裁判官の知らぬ事まで残らず知つたる此妾に我罪を隠さんと痴頑にも程がある、妾が先の日汝に向ひ是迄の事を所夫伯爵に打明て汝が身を

亡さんと威附た其言葉を汝は誠に思ひ詰め、此儘居ては伯爵に如何なる責苦を受けんも知れねば我より先に彼れを殺し、我身の安樂を謀らんとて臆病な心から妾の家に火を放ち伯爵を誘き出し狙撃にしたる事鏡に掛けて見るよりも妾が眼には分つて居る、夫を妾に隠さんと狼狽しか狂氣せしか妾は此事を判事に言立るは易けれど、一つには妾の名譽を重んじ二つには汝の身を憐れみ今まで言はずにありたるを有難しと思ひはせず反つて裁判所の使ひと偽り妾が家へ何しに來た」武保は聲を放つて打笑ひ、武「フム賢くも考へたナ、夫で言譯が立つと思ふか、此武保が若し手前の威言葉を恐れるなら伯爵より先に手前を殺すのだ、あの夜一打に手前を片附け其上で伯爵を殺すのは何より易い仕業だけれど、夫を今まで助けてあるのは手前の威しを恐れぬ證據だ威を恐れぬ此己が何しに伯爵を殺さうぞ、其様な淺慮な言拔で此己を罪に落さうとは可笑さ餘つて可愛想だ」と夫人の心の奥までも貫くかと思はる、鋭き調子にて罵る様は全く身に覺えなき人の詞と外は思はれず、餘りの不思議に夫人は唯だ呆れ果たる如く口の中にて、夫「誰が其様な事を信する者か」と呟きし

が又も言葉を張揚けて夫「コレ武保汝も不思議な言葉を吐く者かな、伯爵を殺せし者が汝の外に誰かあるや、愈々汝でないとならば何人が伯爵を殺せしや、サア誰が、サア誰か」武保は顔の色紫と變するまでに怒を現はし碎くる程に夫人が手先を握り詰め、火焰よりも熱したる叱咤の呼吸を夫人が額に注ぐばかりに重り掛つて大喝一聲武「此横着者め、手前が自分で我夫を殺したのを知らぬのか、自分で殺して誰がとは何の事だ、手前はナ己が錦嬢と婚姻する事を聞き、嫉妬に女たるの道を忘れ其婚姻を妨げんため自分で所夫を殺したのだ、先の夜手前に逢つた時己は偽りの涙に欺かれ、手前の悲みを思ひ遣り迫ては其心を慰めんとて我れ唯だ汝に所夫ある爲め汝を娶り得ざるを憐むと氣休の言葉を吐いたところ手前は夫を眞に受けて妾若し此事を知らば早く自由の身となりし者と天に手を舉げ祈つた事を忘れはすまい自由の身とは何の事だ即ち夫を殺すと云ふ明白な意味ではないか、コレ女有體に白狀せよ、是でも猶ほ隠す事が出来ると思ふか」と言ひながら夫人が言ひし言葉を其儘に繰返し武「サア伯爵を殺せし者、汝の外に誰がある、愈々汝でない

とならば何人が伯爵を殺せしや、サア誰が、サア誰か」夫人は今まで武保とのみ思ひ居たるに此言葉を聞きて益々心迷ひ武「夫は汝でない」と云ふのか、ア、武保汝は眞實に妾を疑ふかや妾が伯爵を殺せしと思ふのか」武保は領首きて武「爾サ自分で殺さずとも人を使つて殺させたのサ、夫人は魂も消ゆるばかりに悲しみの色を現はし夫「其様な疑ひを受けるとは實に夢にも思はなんだ」と打嘆く有様は是亦偽りとは思はれず武保は夫人を疑ひ、夫人は武保を疑ひて心互に戦ふのみ、ア、先程より戸一枚を隔てたる入口の外に短氣なる黒戸伯爵其人が短銃を手に持ちて此争ひを立聞居て二人の命今正に一發の間にありとは神ならぬ身の得知らぬこそ是非なけれ。

今斯く夫人と武保が互ひに争ふ様を見れば此事件の罪人は夫人にも非ず武保にも非ず、猶ほ外に實の罪人ある者と見えたり、ア、實の罪人は誰なるや、罪なき者疑はれて罪ある者未だ分らず不思議と云ふも愚かなり。斯くて夫人と武保は互に奇異の思ひを爲し夫人は武保が心を探らんとし、武保は夫人の心を探らんとして双方臆を凝つ、唯だ眼と眼を見合

すのみなりしが其中に双方とも疑ひの心稍弛み、武保は夫人の罪人にあらぬを知り、夫人は武保の罪無を知れり。言葉を以て争ひては何時までも嗜る、事なき疑ひなれど是ぞ神経の作用にて以心傳心とも稱す可く何時とも無しに二人とも我思ひ違ひを悟りしなり。去れども悟りて後の疑ひは悟らざる中の疑ひより猶辛く夫人は殆ど途方に呉れたる如く其言葉さへ和きて「何うすれば好だらう」武保も今までの荒々しき言葉は消え昔し夫人と忍び會ひし頃の調子と成り「有の儘を裁判所へ打ち明るより仕方が無い」夫「有の儘とは」武「兩人が奸夫姦婦で有つた事より、あの夜手紙を焼く爲めに忍び逢ひしこと兩人が分れた後で何者か火を放ち伯爵を狙撃したこと、之を残らず言立よう」夫人は驚ろきて「何うして」それを言立つて成ものか、星川武保はまたも言葉を少し荒くし武「でも外に言立る事は無い、何うしても有の儘を白状せねば」夫人も亦少し心を燥ち夫「イヤ其白状は出来ないよ、能く考へて御覽ナ、二人の仲が裁判官の聞に入れば必らず二人言合せてあの罪を犯したと見做され二人とも罰せられるよ」武「でも殺されるよりは未増しだ」夫「イエサ、白

状した所が無駄な事、お前もそれで助かると云ふでは無し其上妾までも連類に」と半分言はさず武保は押し止め武「イヤ私の爲めには命の境貴女が連類になるのならぬのと氣永いことは言て居られぬ」夫人は何思ひけん此言葉を聞きて忽ちに顔の色を和け武保が傍に寄り添ひて夫「コレ武保お前の命の境とならば助ける工夫は外に在る能くお聞き妾は幾度か話した通り命よりも名譽を大事と思ひ名譽の爲めには我命も笑つて捨てる積りで有るが可愛と思ふ男の爲めには其名譽でも厭ひはせぬ、ハイ名譽を捨て助けて遣る、コレ武保お前本統に助かり度か」様子有りけな此言葉の深き心は分らねど武保は唯だ領首くのみ夫人は亦も言葉を進め夫「コレ武保妾の愛は變らぬゆる、お前が助かる心なら妾と共に逃てお呉れお前さへ承知なら妾は世間を捨て仕舞ふ名譽も要ぬ夫子も入ぬ此儘捨て逃亡するから」夫人が心には往昔の愛情又も燃へ返りて今は一人の力を加へ自ら制し難しと見へ亂し髪は汗に濕へる額に垂れ顔には今までに見し事なき麗はしき色を浮べ、言葉に無量の情を込めつ夫「お前此通り牢の外へ出たからは最う譯もなく逃られる、サア逃ると一言云つてお呉れ

妾も初めは―あのソレお前の胤の季の娘を連やうかと思つたが子供を連れては手足纏ひ、
二人此儘此地を去り知らぬ他國へ逃行けば世間へ兼る義理もなし二人仲好く末の末まで―
エ、武保妾と逃るが厭なのかかエ」武保は聞來りて殆ど魂の鎔けるばかりに其心動きたれ
ど此時清淨なる錦嬢の愛を思ひ出せしかば動く心を取止めて武「逃るよりは殺されるが
増だ厭な事」此言葉に夫人は忽ち麗はしき色を失ひ堪え難き怒りを催うし來て夫「夫
が厭なら―お前は茲へ何しに來た」武「貴方の力を借り此裁判を遁るゝ積りで」夫「馬鹿
な事をお言でない、妾と一緒に逃るが厭なる助ける工夫はない、もう之までだ裁判所へ今
までの情交を打明けては好やお前は助かるとも妾の名譽は亡びて仕舞ふよ、お前は先ア妾
の身を亡ぼしてまで自分を助け度のかエ、夫では虫が善過るだらう、ア、分つた妾を亡ぼ
し出後で錦嬢と婚姻を結ぶ爲めに―エ、口惜い、最う何と云つたとて妾はお前を助けま
せん、夫ほど錦嬢が大事なら何故嬢に助けて貰はぬ、サ武保早く嬢に助けてお貰ひ妾はお
前の敵だから―お前が假令ひ裁判所で何の様な事を言立やうと妾は我身を辯護して判官を

言込る工夫がいくらもある少しも恐れはしないから」と云ひ來りて嘲る如く打笑ふ此奇變
を極めたる夫人の振舞に武保も今は堪え兼ねる迄に怒りを發し思はずも拳を振上げ夫人が頭
上を唯一打に打碎かんとする折しも忽ち入口の外に聲あり「コレ待て兩人」と呼止るは
正しく黒戸伯爵の聲なれば夫人も武保もキヤツと叫びつ驚いて振返れば瘦衰へし黒戸伯は
右の手に短銃を持ち左の手にて戸を開きつ二人の顔を屹と眺め伯「先程より残らず聞いた
―覺悟を致せ」ア、辯護人大川初め其他の人々の苦勞さへ今は唯だ一發の短銃にて武保が
命と共に消えんとす、夫人は其儘椅子の上に錯伏せしが武保は起上りて伯爵に向ひ武「今
まで足下を辱しめた此武保、サ此場で命を上げませう」伯爵は苦笑ひて伯「イヤ茲では
命は取らぬ、裁判所へ引渡す」此意外なる言葉に武保は震へ上り武「夫は餘りの卑怯と云
ふ者」伯「イヤ卑怯ではござらぬ、人の妻を奪ひ剩さへ己れの子をまで人の子として養
はせる事犬猫にも劣る業、此度我家へ火を放ち我身體を狙ひし者足下でないとは知つて居
れど足下の如き汚らはしき男を此儘生しては置れぬゆる法律で殺して呉れる」武保は再び

被^{かい}判^{はん}の耻^{はぢ}を受けんよりは今^{いま}死^しるこそ本^{ほん}望^{ぼう}と殊^{こと}更^{さら}胸^{むね}を押^お開^{ひら}きて伯^{はく}爵^{しやく}の前^{まへ}に立^た塞^まがり武^ぶ「コレ卑^ひ怯^{けつ}者^{もの}、サア放^{はな}て、サア殺^{ころ}せ」と罵^{のの}りて詰^つ寄^よすれど伯^{はく}爵^{しやく}は感^{かん}ぜぬ體^{てい}にて伯^{はく}「イヤ法律^{はふりつ}で殺^{ころ}して遣^やる足^{あし}下^かが裁^{さい}判^{はん}所^{しょ}へ出^だされる時^{とき}、拙^{せつ}者^{しや}は證^{しょう}人^{にん}に呼^よ出^だされる故^{ゆゑ}其^{その}時^{とき}は判^{はん}事^じに向^{むか}ひて拙^{せつ}者^{しや}を狙^そ撃^{げき}せしは此^{この}男^{おとこ}に相^あ違^{ちが}なし、拙^{せつ}者^{しや}は火^{くわ}事^じの明^ありにて其^{その}顔^{かほ}を充^{じゆう}分^{ぶん}に認^みめたり」と確^{たし}かに證^{しょう}言^{げん}して遣^やう、拙^{せつ}者^{しや}自^{みづか}ら證^{しょう}人^{にん}となり此^{この}通^{とほ}り言^い立^{たつ}れば百^{ひやく}萬^{まん}の辯^{べん}護^ご人^{にん}があつても助^{たす}かる事^{こと}は出来^{でき}ぬわへ」と言^いながら一^{いち}足^{あし}前^{まへ}に進^{すす}みしが今^{いま}まで張^は詰^つめし心^{こゝろ}の弛^{ゆる}みしと見^みへ伯^{はく}爵^{しやく}は其^{その}儘^{まま}前^{まへ}に倒^{たふ}れたり。餘^{あま}りの恐^{おそ}ろしさに武^{たけ}保^ぼも氣^きを奪^{うば}はれ狂^{くる}氣^きの如^{ごと}く此^{この}家^やを斷^き出^だで何^{なん}處^{ところ}ともなく逃^{にげ}去^されり。

二三 意外な出来事

武^{たけ}保^ぼが黒^{くろ}戸^こ夫^ふ人^{じん}に面^{めん}會^{かい}せし翌^{あした}日^{じつ}の朝^{あさ}なるが代^{だい}言^{げん}人^{にん}大^{だい}川^{がわ}萬^{まん}英^{えい}は山^{さん}堂^{だう}家^かの一^{いち}間^{かん}にて早^{はや}くより調^{しら}べ物^{もの}をなし居^ゐたるに武^{たけ}保^ぼの下^{した}僕^べ案^{あん}藏^{ざう}周^{しゅう}章^{ちやう}しく入^いり來^{きた}り案^{あん}「先生^{せんせい}何^{なん}うも大^{だい}變^{へん}な事^{こと}が出来^{でき}ま

した、夜^よ前^{まへ}牢^{らう}から逃^{にげ}て仕^し舞^まひました」大^{だい}「逃^{にげ}たとは誰^{たれ}が」案^{あん}「日^{にち}那^な様^{さま}が逃^{にげ}ました」アノ武^{たけ}保^ぼ様^{さま}が」と聞^ききて大^{だい}川^{がわ}は心^{こゝろ}に痛^{いた}く驚^{おどろ}きたれど左^{ひだり}あらぬ體^{てい}にて大^{だい}「ナニ左^{ひだり}様^{さま}な事^{こと}がある者^{もの}か案^{あん}」でも逆^{さか}たに相^あ違^{ちが}ありません今日^{けふ}は最^もう世^よ間^{かん}の大^{だい}評^{ひやう}判^{はん}となり既^{すで}に嬢^{じやう}様^{さま}まで此^{この}事^{こと}を聞^き知^しつて一方^{かた}ならぬ御^ご心^{しん}配^{はい}です貴^{あなた}方^{なた}先^まア嬢^{じやう}様^{さま}のお部^へ屋^やへ入^いりつて御^ご覽^{らん}なさい」大^{だい}川^{がわ}は危^{あや}みながら錦^{にしん}嬢^{じやう}が室^{むろ}に入り行^ゆくに嬢^{じやう}は最^もと心^{しん}配^{はい}の面^{おも}持^{もち}にて錦^{にしん}「ネエ大^{だい}川^{がわ}さん武^{たけ}保^ぼが前^{まへ}夜^よの中^{ちゆう}に出^い奔^{ほん}したと申^{まを}しますが」大^{だい}「イヤ夫^{おとこ}は全^{ぜん}く偽^{いつはり}りです、決^{きつ}して逃^{にげ}て仕^し舞^まふ筈^{はず}はありまん」錦^{にしん}「とは又何^{また}何^{なに}う云^いふ譯^{わけ}で」大^{だい}「イヤ我^{わが}身^みに罪^{つみ}のない人^{ひと}は決^{きつ}して逃^{にげ}など致^{いた}しません、武^{たけ}保^ぼ殿^{どの}に限り左^{ひだり}様^{さま}な卑^ひ劣^{りやく}な事^{こと}をする筈^{はず}はありませぬ」嬢^{じやう}は尙^{なほ}ほ其^{その}言^{ことば}葉^はの我^{わが}意^いに落^おちぬ如^{ごと}く漸^や々^や重^{おも}き唇^{くちびる}を開^{ひら}きて嬢^{じやう}「貴^{あなた}方^{なた}は昨^{けふ}夜^よ武^{たけ}保^ぼが牢^{らう}から外^{そと}へ出^でた事^{こと}は御^ご存^{ぞん}じでせう」大^{だい}「ハイ夫^{おとこ}は存^{ぞん}じて居^ゐますが併^{しか}しあれは何^{なに}も逃^{にげ}亡^{ぼう}する爲^{ため}に牢^{らう}を出^でたのでありませぬ唯^{ただ}暫^{しば}し黒^{くろ}戸^こ夫^ふ人^{じん}に面^{めん}會^{かい}するだけの事^{こと}です者^{もの}を」抑^{おさ}も黒^{くろ}戸^こ夫^ふ人^{じん}が武^{たけ}保^ぼと譯^{わけ}ある由^{よし}は初^{はじ}めより堅^{かた}く錦^{にしん}嬢^{じやう}に隠^{かく}し置^おける事^{こと}なるに大^{だい}川^{がわ}は思^{おも}はずも口^{くち}をすべらし、黒^{くろ}戸^こ夫^ふ人^{じん}の名^なを口^{くち}外^{ぐわい}したればハツと自^{みづか}ら氣^きが附^つ

きて直に云紛らさんとなしたれど其事既に遅し、錦嬢は此一言にて人々が日頃隠し居たる事の次第を悉く推量し得たり、嬢は忽ち其顔に朱を注ぎて錦「オヤ武保が昨夜獄屋を抜出したのは黒戸夫人の爲ですか、妾は一前日武保の言葉を聞いた時何でも外に言交した女があつて逢ひに行くのだらうとは思ひましたが、アノ先ア名譽の高き黒戸夫人が武保の愛する女ぞとは夢にも知らずに居ました」と云ひ來りて涙を催ふし更に言葉へ熱度を加へて錦「大川さんは是で最う何事も分りました武保は全く逃去つたに相違ありません、ハイ武保は夜前夫人に逢ひ色々と話した時、夫人も武保を愛する餘り妾が先の日勧めた様に矢張り逃亡を勧めました、妾の勸には従はざりし武保なれど黒戸夫人の言葉には背き兼ねたと見えます、今更ら思へば武保が妾の言葉に従はなんだ最早や其時から夫人と共に逃る心があつた者と思はれます、ハイ黒戸夫人は武保と妾と婚姻させまじと其逃る事を勧めたのでありませう」と一筋に思ひ詰ては打叩つ少女の心を大川も今更ら慰め兼ね大「イヤ其様な事は決してありませんから御安心なさいませ、併し猶ほ貴嬢のお心が休まるやう私は是から獄屋へ

行き實否を見届けて参ります」

是にて嬢に別れ獄屋を指して立出しが道々にて人の噂を聞くに誰某は昨夜何所某所にて武保を見受たりなど云ひ實しやかに稱ふる者もありて最氣遣はしき次第多ければ足を早めて漸く獄屋の内へ入るに武保は夜前の中に首尾能く歸り來たる者か寢臺の上に俯向きて横はれる其有様痛く失望せし者に似たり大「コレ星川君何うしたのだ」武保は最重た氣に身を起し、大川が顔を熱々と打凝視て武「イヤ今度こそ最う駄目だ頼みの綱も切れ果て、到底も助かることは出来ぬ」と嘆息しながら昨夜の事柄を残さず語り殊に黒戸伯爵が妻を奪はれし復讐に他日法廷へ出て我を狙撃せしは全く星川武保なり、吾れ彼の夜火事の明りにて明白に武保の顔を認め得たれば疑ふ所更になしと確かに証言する事を誓ひたる由まで打明けしに大川も殆ど困り果て我今までに心を凝して案じ出せる辯護の工夫も是にて全く破るゝかと思へば張詰たる氣も弛みて大「イヤ夫は實に困つた事になつたわへ、黒戸伯爵が自ら法廷へ出て其通り言立れば何としても言破る道はない」暫し黙然として考へし末

又も大川は首を擧げ 大「シテ君は黒戸家を立出てから直に此處へ歸つたのか」 武「イヤ僕は最う失望と恐れに爲めに氣を失ひ何所を目當ともなく夢中になつて走つたが漸やく氣がついて見ると早や星川村の近邊へ出て行て居た是は何でも夢中ながら平生通り慣れた道を走つた者と見える、僕は初めて氣がついた時最う逆も駄目だから此儘星川村へ行き別荘の中で自殺しやうと思つたけれど又思ひ返せば先日君に向ひ、死までも我身を辯護すると約束した事を思ひ出し且放火殺人罪を受け其疑ひを雪ぎ得ずに死ぬるは我家名までも汚す譯と考へ附き我と我心を勵まして漸く夜の二時頃に此牢に歸つて來た、大川も此健氣なる決心を賞揚し 大「爾うとも君が此儘自殺しては今迄の骨折りも水の泡だ、未だ宣告を受たではないから決して力を落すことはない、若し肝腎の裁判の時までに黒戸伯爵が死で仕舞ふと云ふ事もあるだらう、昨夜の中に既に死だ事かも知れないよ、ナニ未だ失望する事はない」 武保は四邊を見廻し 武「イヤ其事さ、僕も伯爵が夜前倒れた儘で或は死で了つたかも知れぬゆゑ何うかして其生死を聞定め度いと思つて居た」 大「爾だ伯爵が猶ほ生て居て愈々其

證言を裁判所で言立る上は假令君の身に罪はなくとも君は其罪に落さる、故、是から後吾々の運動は伯爵の生死に由て何方とも定まると云ふ者だ、何しろ一刻も早く其生死を探らねばならぬテ」 大川は霎時考へて撥と手を打ち 大「ア、氣が附かなんだ醫師關登に問ひさへすれば直に分るのだ、僕は早速關登の家へ行て來やう」 尙ほ二三の密談をなしたる上大川は武保に別れて關登が許に指し行けり。

すると登は早速出迎へて 關「イヨ大川君、今朝から君を待て居た、全體昨夜黒戸伯爵の家に何事があつたのだ」 先を越たる此問ひに大川は驚きて 大「夫では君は昨夜の一條は最う知つて居るのか」 關「イヤ知らぬのサ、知らぬけれど何か非常な事件があつたに相違ない」 大「とは又何う云ふ譯で」 關「實は昨夜前の十二時頃に黒戸家から至急に僕を迎へに來た僕は何事かと思つて其の使ひに聞て見ると只今主人伯爵が急に死だのですと答へた」 大川は又も驚き 大「へエー伯爵は死だのか」 關「イヤ先ア靜かに聞き給へ、伯爵は此二三日大分快い方であつたから俄かに死だ」と聞き、僕も不審に思ひ早速飛で行て見ると伯爵は應

接の室へ倒れて其儘呼吸が絶て居た併し僕は診察の上一時の氣絶と認めたから色々手を盡した所漸やく呼吸を吹返したネ、君、場所もあらうに應接所で倒れるとは餘程不思議だから僕は夫人に向ひ全體何う云ふ譯で伯爵が應接の間などへ行たのです、誰れか非常な來客でもあつたのですかと問ふた所平生は物に落着いた夫人だけれど此間には當惑したと見え唯だ唇を動かすばかりで何の返事も出ないのサ、其上伯爵も病苦の中より同じく當惑相な顔をして何の返事もなかつたが流石は男だけに旨く胡魔化して、ナニ此方は今夜少の氣分が好い様に思つたから、一人で歩く事が出来るか出来まいかと思ひ我力を試して見る積りで獨り寢床を這出で應接の室まで徐々として行て見たが未だ何うも身體が充分でないと見え、入口の敷居へ躓き其儘打倒れ倒れる途端に何處か急所を打たと見え前の通り氣絶したのだと斯う云つた。併し僕は其脈を見るに動機が非常に高い故決して其言葉を信ぜず、何でも非常な事があつたに違ひないと思つて居た、夫でも先づ何氣ない顔をして夫々手當をして居ると其處へ下女が來て雅子様が今し方より急に病氣になつた故先生直に診て下さい

と言つて來た、ホラ君、雅子とは先日も見たあの娘よ、黒戸伯の長女よ、ネ僕は若しや雅子の急病も伯爵の氣絶に關係のある事ではないかと思つた故早速又其寢間へ行き診察して見ると案に違はず是も亦何か物に驚いて急に病くなつた様子だ。僕は心に領首ながら段々と言葉を設け雅子を問落して見ると雅子が言ふには先生妾は今夜吃驚しましたよ、あのネ乳婆と一緒に寢て居ると玄關へ誰れか人が來た様だから誰だらうと思つて居る中、應接の間で阿母さんと誰かと喧嘩する様な聲が聞えました爾すると又庭でも人の足音がする様だから私は窓を開けて覗いて見ますとネ先生石燈籠の影からお化がออกมาしてネ其お化が庭の木の枝へ登つて應接の間を窺いて居るの、私は餘り恐しいから窓を閉やうと思つても身體が萎んで動かれませんかから恐々ながら見て居るとお化は又木から降り今度は應接所の窓へ這登り窓から内を窺いて居ましたが、夫れから暫らく經て何だか應接所で夫變な聲が聞えたと思ひましたが爾すると前に來た人が應接所から飛出して門の方へ逃て了ひ其後からお化も逃て行きました先生妾は未だ目の前に其お化が見ゆる様な氣が仕ますよ、と顔の色

を青くして話したから僕は神經の講釋をして聞かせ好加減に其場を濟せて夫々藥などを與へたが心の中では何でも非常な事件があつたに違ひないと思つた、夫から僕は歸り際に一策を廻らせ女關から出すに勝手口から出て應接所の窓の外を通り態と巾着の口を開いて五六枚の銀貨を其處へ落とし、夫を拾ふ振りで地の上を検査して見たが其お化の足痕が歴々と存つて居た、幸ひに下女が燈を點て送つて來た故其燈りを地へ差付けて篤と見たが其お化の足附は丸で兵隊か懲役人の靴痕と同じ事であつた、是まで聞き來りて大川は横手を打ち大「アめた其お化こそ初めから終りまで一件を見て居たのだから何よりの證人だ」關登は怪みて關「證人とは何の事だ、先ア詳しく事の本末を聞かせて呉れ給へ」大「實はネ斯云ふ譯さ」と是より昨夜武保が鶴之助を煽動して獄屋を出で黒戸夫人に面會した其處を伯爵に認められし事の次第を残らず話せば關登は聞き終りて關「成る程夫は非常な事件だ、併し伯爵が裁判所へ出て愈々罪人は武保に違ひないと言立る日には武保は助かるまい」大「其事さ、伯爵の口から確かに武保だと言立ては何と辯護しても到底助かる事は出来ぬが未だ

一つ望みがあるのは今のお化だテ」關「お化が何うしたと云ふのだ」大「イヤサ其お化と云ふのは鶴之助に違ひない」關「成る程爾だ、鶴之助が必ず武保の様子を怪み其跡を追けて黒戸家まで行たのだ」大「爾よ、夫で彼奴は初めから終りまで應接所の中を覗いて居たのだから彼奴さへ探し出せば第一の證人となるのだ」關「成る程黒戸伯が法廷へ出て罪人は武保だと言立た時、イヤ伯爵の言立は偽りだ伯爵は全く武保を怨むの餘り其様な事を申立るので其證據は此人だとして鶴之助を引出すのだナ」大「爾とも爾すれば鶴之助が昨夜の事を申立てるから、其處で初めて武保と黒戸夫人が色であつた事が分り又伯爵は我妻を盗まれた恨みに其様な偽りを申立た事が分るから裁判は丸で引線返り再び初めから吟味の仕直しとなる、其中には英國から下女の薄木お歌も來るだらうし、太々郎に口を開かせる事も出來ると云ふ者だ」關登は思はずも聲を發し關「愉快／＼實に古今無類の裁判となるわへ」とて我知らず雀躍せしが又も其眉を擧め關「だがネ、其肝腎の鶴之助は今何處に居るのだエ」大川も困じ果たる體にて大「夫がサ第一の困難だて彼奴の居る所が分りさへすれ

は何の心配もなけれども彼奴は何所へか逃て仕舞たから何うしても裁判までに度奴を探し出さねばならぬ」ア、武保が一命は今唯だ鶴之助の行衛如何にあり、鶴之助若し裁判の初まる迄に現はれ出なば武保は助かれど不幸にして裁判の後までも其居所分らぬ時は武保は伯爵の一言にて死刑にまでも處せらるゝ事必然なり、去れば大川萬英は是より私かに數多の探偵を雇ひて只管ら鶴之助の行衛を捜さしめたるも其甲斐なし彼れ孰れに隠れたるや更に手掛りを得ず、手掛りを得ざるに裁判の日は追々近きて愈々明日と云ふ今日にまで迫りたれど鶴之助は分らず、下女薄木お歌も未だ來らず、太々郎も口を開かない大川の目算は全く手違となれり。武保が命は最早や助かるべき見込なし、見込なく終に武保は裁判に附せらるゝ事となれり、哀れむべき限りにこそ。

二三 公判

これは是れ裁判の前日なり。武保の運命は明日一日にて定まれるなり。辯護を引受けた

る代言人大川萬英は今まで種々様々に手を盡し、人を英國に馳せて薄木お歌を捜索させ探偵棟田を病院に入れて太々郎の口を開かしめんと計り又數十の秘密探偵を放つて鶴之助の行衛を探らしむるなぞ金錢を算へず、努力を惜まざるだけの工夫は試み盡したれど其事の一つだも纏まらざる先に早や裁判の日とはなりき。殊に黒戸伯爵さへ愈々法廷に出て此度の罪人は武保に相違なき旨を言立る事となりたれば最早や大川の雄辯を以てするも、眞倉の信用を以てするも到底武保を助くるの望みは盡き果たり、去れど大川と眞倉とは別に何か思案のある事にや或は又思案はなけれど唯人々の氣を落させまじとてか顔には何の悲みをも何の心配をも現はさず、又他人の前にては一言も辯護上の工夫を口外せざれば人々は孰れも其心の中を察し兼たり。此夜大川と眞倉は連立て牢屋に行き武保に逢ひて夜の更るまで何事かを相談せしが是は定めし明日法廷にて言立つべき事と言立べからざる事とを打合せし者ならん、斯て此夜は漸く明け愈々裁判の當日となりけり。武保が運の定まる日となりたり。今茲に此裁判の模様を知らしめんが爲め當日の新聞紙より一二の雜報を抜萃

せん。

○裁判官、本日は兼て世人の待設けし星川武保公判の日なるが裁判長は有名なる民内判事(原名、タミナイ)檢察官は堀判事(原名、ホール)にして兩氏とも一昨々日巴里より特別に派遣されたり。

○傍聴切符、此度の星川武保の裁判は世人の心を引きし事是までに其例なき程にして其傍聴切符の望み人非常に多く、昨日は内々之を賣る者あり。朝の中は一枚五十錢位なりしが夕方には一枚三圓まで騰貴したれど望み人のみにて賣手は更になし、裁判の傍聴切符の相場を生じ金銭にて之を賣買するとは實に前代未聞の珍事と云ふべし。

○太々郎、星川武保の事件より一時に世人の注目する所となりたる太々郎は愈々全くの愚人と定まり、今まで愚人に非すと主張せし醫師關登氏も昨日に至り彼れは愚人に相違なき旨裁判官に報告したり。依つて檢察官も最早や彼れが最初の證言は全くなき者と見做し辯論の中へ加へざる事に決定せりと洩れ聞きたり、去れば辯護人も法庭にて彼れが事は述ざ

るならんと云ふ。

○黒戸伯 は數日前病氣危篤と聞えたるも昨今は大に元氣附きたれば本日は證人として法庭に出頭する由何しろ今度の裁判は世人が片唾を呑んで其判決に目を注ぐ所なれば弊社よりは特に筆記者三名を出し其願末を附録として今夜の中に配達すべし云々

其外此裁判に關する雜報は孰れの新聞も其紙上の過半を塞ぎたり。頓て夕方に至りて裁判は愈々落着し宣告までも濟みたれば孰れの新聞も特に附録を發して其景況及び傍聴筆記を載せたり。今其中の一なる澤部町獨立新聞の附録を其儘茲に載せん即ち左の如し。

●放火殺人罪の公判 (廿三日木曜日)

澤部町は平生極めて靜穩なる土地なるに今日は何故に斯く騒がしきや今日は是れ世人の待に待たる星川武保が公判の日なればなり。商人は算盤を捨て車夫は車を抛ち我先にと傍聴に出掛たれば裁判所の門前は夜の明けぬ中より非常の雜踏を極め、一時は其門を打破る

程なりしも憲兵と巡查との盡力にて漸く取鎮めえたり。斯る有様なれば裁判所にても特に傍聴席を取擴げ、三個の法廷を合せて一個となし三千七百人まで其席に入れたれど何しろ十里五十里も隔たりし土地より泊り掛にて傍聴に來りし人も多ければ傍聴し得ずして空しく歸りたる人幾人なるを知らず頓て定め時間の時間となり先づ抽籤を以て陪審官十二人を定めたるに被告及び堀檢事ともに異議なく其十二人を承諾したり被告席の傍らに被吾の親戚の爲め特別の席を設けたり。之に就ける人々は被告の父母なる星川侯爵夫婦、山堂直家老人及び錦嬢等なり。親戚は孰れも顔色青く何となく鬱きたる様子に見受けたるも獨り錦嬢のみは顔色晴れ渡りて眼涼しく傍聴席の四方より目禮にて挨拶する貴人達に一々笑顔を以て會釋したるは甲斐なくしくもいぢらし、判事席の前に廣き卓子あり其上には白き布を覆ひたり。布の下には武保が犯罪の證據品を集めたる者なれば人々は皆此物凄き卓子と錦嬢の麗はしき顔とを見較べたり此時既に十一時に至りしかば掌廷の役人は傍聴人を推鎮め頓て左りの方なる潜りの戸を開き、二人の辯護人入來れり辯護人は讀者の知る如く我

土地の眞倉氏と巴里の大川萬英氏なり。二人は最勇み且つ最落着きたる顔にて知れる人々に會釋し、頓て手提より書類を取出して閲讀を初めたり。十一時半となりぬ、裁判長民内氏及び檢察官堀氏席に就き其背後に陪審官居並びたり。此時忽ち法廷の碎くるばかりに騒がしくなりたれば何事なるかと見るに被告星川武保入來りしなり。武保は黒き立派なる服を着け、其釦の穴には作年有志兵を率ゐて戰場に臨みたる爲めに授かりたるジョン、ドノルの勳章を掛けたり。長く牢にありたる爲めか色青白く肉瘦せたれど其舉動は更に悪怯す稟として威風あるを覺えつ武保席に就くや否傍らより手を差延べて最喜ばしけに挨拶する紳士あり。誰かと思れば醫師關登氏なり頓て掌廷の官吏は傍聴に向ひ一言にても判事若しくは被告人の言葉に賛成し又は之を罵る如き事をなす者あらば直に場外に追放すべしと述ぶるに満場は水を打ちし如く鎮まりたり。判事は嚴かに被告に向ひ官吏「姓名年齢職業住居を申立よ」被告武保「姓名は星川武保、年齢は二十七職業は山林及び土地所有者、住所は當區星川村であります」官「其方が受けたる嫌疑の次第を讀聞さん」

是より書記根根氏は朗かなる聲にて抑揚もなく頓挫もなく一直線に棒の如く其嫌疑の次第を讀聞かすに抑揚のなき所却つて人の腸を穿るが如く人々は思はず身震ひを爲したり、其嫌疑の次第と云へるは讀者の既に知る所なれば茲には省き直に進んで取調べの事を記さん、此時裁判長民内判事は武保に向ひ判「コレ被告、起立して明瞭に申立よ、其方は豫審中判事の間に對し何の答もせず、徒らに口を結んで居たが茲は豫審廷と違ひ公判廷であるから有體に申立ねばならぬ、隠し立をしては却つて其方の不利益であるぞ」武「其仰がなくとも今日は充分に申立る所存であります、何なりとも御尋問を願ひます」判「其方豫審廷に於て何故に噤黙致した、何故に返答をしなかつた」武「ハイ公判になる迄は何事も言ぬ方が一身の利益と存じました」判「其方が嫌疑の次第は先程書記が讀聞かせた通り放火殺人の犯罪だが、其方覚えがあらう」武「少しも覚えはありません全體春邊村の犯罪は烏や兎を射つ散弾で以て黒戸伯を狙撃したのだと聞きますが少しでも鐵砲の道を心得た者は決して斯様な事は致しません、若し私ならば人を殺すに獵銃などは用るません」判「イヤ

夫は辯論に渉る」武「辯論でも宜しい」判「イヤ辯論は後に譲り今は其方に問ふだけの事を申立よ」武「畏まりました」判「其方は近々山堂家の令嬢と結婚を致す約束であつたと云ふが相違ないか」此時滿場の傍聴人は一齊に眼を錦嬢に注ぎたれば嬢は其顔に朱の色を現はしたれど猶も其首を垂れざるは流石に令嬢の威儀と品格を頷さぬ者と云ふべし、武保は最低き聲にて武「相違ありません」判「彼の犯罪の日、其方は錦嬢に宛て手紙を出した覚えがあるか」武「ハイ手紙を書き之を門番の息子道次と云ふ者に持せて送り届けました」判「其手紙には何を認めた」武「大切な用事があつて今夜は逢ふ事が出来ぬとの断りでありました」判「其大切な用事とは何事じや」武保が答へんとする時も判事は重ねて言葉を聞き判「注意せよ、其方は初めて調べを受けた時此間に對し武市村なる領地番の許へ行たと答へてあるぞ」武「其答へは少々違つて居ます」判「違つて居るなら偽りだ、其方何故に豫審判事に偽を申立た」武保は偽との一言に少し立腹の體にて其「初めて豫審判事輕養が私の家へ來まして私を取調べた時、私は冗談だと思ひました夫ですから我が

一家の私事を他人に知らせるを好まず唯だ番人の所へ行たのサと答へたのであります「判」初めは冗談と思つても直様冗談でない事が分つたであらう」武「バイ」判「然らば冗談でない事が分つた時何故直に充分の事實を申述べぞ」武「イヤ元來豫審判事は日頃から親友の様に交際をして居た輕篁氏ですから、餘り親密が過つて却つて充分の申立が出来ませんでした」判「ナニ親密が過つて、最少し詳しく言つて見よ」武「イヤ是から上の事は申されません、是また親友の交際をした輕篁氏に對し彼れ申すは情に於て忍びません」此時堀檢察官は立上り滿場を睥睨しつゝ、最と鋭とき音調にて、檢「被告は曖昧の言葉を以て輕篁判事を傷つけんとする者であります、輕篁判事は法律の爲めに親友たるの情を捨て、千辛萬苦を嘗て彼れ被告を調上げた者であります、然るに被告は此手柄ある輕篁氏を誹毀するは聞捨てになりません、被告若し判事の爲めに充分の言立が出来なだとならば何故に早く判事の取替を願ひませんか、彼れ今更ら斯様な曖昧な事を申立るとも裁判長はお取上げにならぬ事を願ひます」此の言葉に應じて被告の辯護人眞倉氏も立上り眞「檢察官の御注意

を煩はす近もなく吾々は既に幾度も判事取替の事を被告に勧めましたけれども被告は堅く自分の無罪を信じ、假令何の様な判事でも罪なき人に罪を附る事は出来ぬ故判事の取替には及ばぬと充分に安心して吾々の勧めを聞入れません」此答を聞き檢「イヤ此判斷は陪審員に托せませう」と言捨て座に就きたり。判事は亦も被告に向ひ判「サア是より其大切な用事の次第を申立よ」武「私が今まで此用事を申立ずに居ました故豫審判事は益々私を疑ひ其用事とは即ち黒戸伯を殺す事であつたらうなど、推測を逞ふしましたが決して其様な用事でありませぬ少しも疑ふ所のない當前の用事です」判「當り前の用事とは何だ」武「私の婚禮は武市村の寺に於て行ふ筈でありました夫に就き種々仕度などもありまして兼てより大凡の事は同寺の和尚にまで通じてありましたが猶ほ委細の事は私しが閑のあつた時を見て夜分に寺まで行き其上で打合せの約束でありました此約束のあつた事は同寺の和尚を呼出してお尋になれば分ります、夫ですからあの夜は其約束に従ひ武市村の寺まで行きました、所が其夜は生憎和尚を初め寺男まで他出したと見え門の戸が閉つて居ます、依

て私はトン／＼と叩いて居ました所折柄通り合せた田舎の女の子が今し方和尚さんは黒須村の方を指して行くのを見受けたと知らせて呉れました故柄は法事にでも招かれて同村へ行たのか夫なら今から其後を追掛ければ逢ふ事が出来るだらうと取つて返して黒須の方へ行きましたが行ても／＼逢ひませんゆゑ扱は田舎の女の子に欺されたのかと細語ながら星川村へ歸りました、歸り着たのは夜の十二時頃でありました「意外に簡單き此言立を聞き判「夫が其方の言聞きか」武「ハイ」判「夫で實しやかに聞ゆると思ふか」武「イヤ實しやかに聞えるか聞えないか夫は貴方の御判断に任せます、私は唯だ有の儘を申立るのでありますから」判「其様な優しい用事の爲め何故に森の中を潜つた」武「大道よりは其方が近道ですから一和尚の寝ぬ前に行き度と思ひまして」判「其方は森の中で利吉に逢つて非常に驚いた由を利吉が申立てあるが我心に暗い所がなければ其様に驚く筈はあるまい」武「イヤ彼の様な森の中に利吉が居やうとは思ひ掛けないから驚きました、誰でも夜分森の中で不意に人に逢へば驚きます」判「其方は利吉に向ひ曖昧な言譯をしたと云ふが」

武「イエ少しも曖昧な事は申しません唯だ武市村へ行くのだと云つたゞけです」判「其方は道々鳥などを射つ積りだとして利吉に鐵砲を見せたと云ふが」武「ハイ見せましたが見せたのが怪しいと仰有りますか少しも怪しくはありません若し私しが人でも殺す積りなら決して鐵砲は見せません、又道で人に逢つたならば疑はれる元だから今夜は止さうと思ひ直し引返して出直すは必然です、然るに私は唯だ平生懸念にする和尚の所へ行くのだから利吉に認められても鐵砲は隠しません引返しも致しません是ばかりでも私しが罪人でない事は分りませう」と最落着きて言立たり。

判「其方果して寺へ行たとならば何故に鐵砲を携帶致した」武「全體星川の領地は兎などの澤山居る場所では日頃獵師と云はれる程獵の事が好であります、何處へ出るにも鐵砲を離した事はありません殊に夜道などは鐵砲を持つ程氣の丈夫な事はありませんから」判「其方は歸りにも林の中を潜つたが是は何故じや」武「先刻より幾度となく私が森や林の中を潜つたのを怪しい事の様にお尋ですが是は獵師の事を御存じないからです成る程通

例の人は林の中を潜るのを何か怪しき事の様に思ひませうが獵師は森や林の中の道を能く知て居まして、平生森の中に慣れて居ますから其中を潜るのを阿とも思ひません殊に其近邊は私の領地ゆゑ草の葉一つでも私の目に見覚えのないのはありません、夫ですから私は唯だ近道くと選んで森とも云はず沼とも云はず潜つたのであります、黒須から星川へ歸るのには大道を通ると林を潜るのは道が半分も違ひます」判「其方は林の中で郷太郎に認められたが其時何か獨語を唱へ非常に憤つて居た様子だとあるが是は何うじや」武「如何にも夫に相違ありません、全く立腹致して居ました」判「何を立腹した」武「ハイ私の此夜許嫁の女に逢ふ筈の約束を斷つて態々尋ねて行つたのに和尚は留守で其上田舎娘に欺かれて黒須まで廻道をしたと思へば何となく忌々しい故口の中でエ、忌々しい和尚だ、エ、失敬な田舎娘だ、あの娘に欺されさへせねば黒須村へも廻らぬ故今夜早く歸つて山堂家へ引返して行かれた者をと斯様に眩きながら歸りました」判「シテ其夜武市村の和尚は不在であつたと云ふ事は確な證據でもある事か」此問に應じて辯護人眞倉は立上り眞「固より

證據は餘る程あります、吾々も武保から其事を聞いた時猶ほ念の爲めに寺へ行て聞合せた所果せる哉彼の夜和尚も寺男も宵の中より不在であつたと申します、又和尚が其夜招かれて行つた家の名も分つて居ます、其家の主人と和尚とを呼出してお尋になれば分ります」判「シテ田舎娘が其方に向ひ和尚が黒須村へ行くのを見受けたと教えた事の證據は何うじや」眞倉は又立ちて眞「是にも證據があります吾々は色々穿鑿せし所、當夜外に武市村より黒須村の方へ行つた和尚があります、其年頃から背恰好など丁度武保の菩提寺の和尚と似て居ますから田舎娘は夫を見違えた者と思はれます、此和尚も呼出しになれば分りませう」判「證人お幸の申立に被告は餘程周章の様子で碌に口もきかずお幸が馬へ荷を附けて遣り其儘我家の方へ行き去つたとあるが」武「相違ありません、其折は最う十一時過で暗ふございまして故お幸も私とは知らずに頼んだと思はれます、私も別にお幸に向ひ口をきく用事はありませんから我名を知らせては先が氣の毒がると思ひ黙つて荷を附て遣りましたが、お幸も荷を附た後で初めて私と知りました夫にお幸の馬が非常に遅い故、私は馬の先へ廻りサ

ツサと歸つたのであります」此時判事は我前の机にある白布を取り去り其中より當夜武保が纏ひ居たる藍縷の着物を取出し判「是は當夜其方が着せし衣服に相違ないか」武「ハイ」判「寺へ行くに此様な背廣などを着するとは餘り無作法ではないか」武「私は山堂家へ行くにも大抵は背廣を着けます、殊に和尚とは別懸の中で禮儀などは正しませんが」判事は次に銅盥を取出し判「此中には手を洗つた水が人つて居たのだが水だけは蒸發させ中に浮んで居た芥ばかり残してある一之れに見覚えがあるか」武「ハイ其翌朝輕養判事が私の宅へ参りました時其中には黒く汚れた水がありましたから私は容す隠せず此水は夜前歸つてから手を洗つたのだと申しました！若しも身に暗き覚えのある者なら其水は前夜の中に必ず溢して仕舞ます、夫を溢さずに置たのは身に暗き覚えがないからの事でありませう」判「シタが其方は何故に夫程手を汚した又何して其方の手に紙の灰が附て居た」此問こそ唯一つにて武保が罪を定むるに足る者なれば三千七百の傍聴人は一様に片唾を呑んで其耳を濟せしが被告は何氣なき體にて武「ソレは最う極々詰らぬ事でありませう私は元來非常の喫煙

者で當夜もマニラの葉巻を大分に持て参りました、道々煙草を喫まうと思ひ衣囊より探りますと生憎寸燐を忘れまして」此時辯護人眞倉は立上りて判事に向ひ眞「判官閣下の注意までに申上ます、被告が寸燐を忘れたと申すのは全くの事實で決して言拔の爲後から作り設けた者でありません其證據とも云ふべきは被告が其前夜寸燐の箱を山堂家の書棚へ置忘れて参りました、今猶書棚の上に其燐あります、此箱には武保の名前まで刻附てあるのですから疑ふ所はありません」判「夫は宜しい！シテ其後は」武「寸燐がないから私は散彈袋を取出し、其散彈を抜取て火薬ばかりとなし散彈の跡へ紙を詰め夫で地へ向けて鐵砲を放しました」判「爾すれば火が出来るか」武「ハイ是は最う獵師は誰も知つて居る事です、尤も必らず一發で火が出来るには限りませんが三發位放つ中に一發は必ず發火します私しは往返りに四五度も火を附けましたから鐵砲は凡そ十四五發も放ちました」判「シテ夫をするのに手が黒くなるのか」武「ハイ火の附た紙を其儘林の中へ捨るは危険ゆる其度に手先で揉消しました、揉消す爲めに手が黒くなりましたので其銅盥に残つて居る紙の灰が

即ち其證據であります」此明瞭なる説明に傍聴人孰れも充分に満足せし様なり、判事は又も鐵砲を取出し判「其様な言拔をするだらうと當方でも充分の證據を遂げてある、コレ此鐵砲を見よ、成る程筒口は汚れて居るが何十發も放つ中には眞黒くなる筈じや然るに此汚れ鐵砲は十數發放つた者ではない右の筒で一度左りの筒で一度都合二度しか放さぬ事は是で充分に分つて居る」武保も此詰問には當惑するならんと思ひしに左はなくて顔色俄かに晴渡り何々と打笑ひて武「私は此辯解は致すに及ばぬと考へます充分鐵砲の道に明るい人ならば決して私の言葉を疑ひません願はくは確かな鑑定人立會の上で御試験を願ひます、素人では私の言葉を信じませんから」判事も兼て此返事あらんと思ひ鑑定人を待せ置きたる者と見え書記に命じて呼ばしむるに頓て出來りしは其道の黒人と知れたる或る骨董店の番頭なり、番頭は筒口に手拭を入れ幾度か其中を試みたる上判事に向ひ番「此筒は兩方とも決して二度から上は放つた者ではありません、爾でなければ最少し此手拭が汚れる筈です」判事は被告に向ひ判「何うじや言譯があるか」被告は猶も笑を含みて武「ハイ夫より

は先づ此筒の直段から鑑定を願ひます」鑑「イヤ直段の事は關係ない」武「イエ筒口の汚れると汚れぬのは直段に依て違ひます、安筒は三發或は五發で眞黒く燻りますが此筒は特別に磨かせたので假令十發打つても其汚れさ加減は一發放つた時と違ひません二十發以上でなければ決して眞黒くはなりません」此答へを聞き滿場は何となく動搖めきしが猶ほ鑑定人と被告の間に二三の問答ありたる末遂に檢察官の注意にて愈々實驗する事となり鑑定人自ら火薬を込め武保の言葉の如く其上に紙を入れて窓の方に行き一方の筒にて五發まで放ちしが其内二發は中の紙燃へながら出たり後にて其筒口を檢むるに果して武保が言ひし如く筒先左までは燻らざる故全く鑑定人の敗となり日頃武保を知れる人々は思はずも喜びの息をホッと吐きたり。此時檢察官は立上り檢「注意まで申しますが此實驗だけでは未だ決して被告が無罪の證據とはなりません唯だ此筒は上等の磨きであると云ふだけの證據ゆる孰れにしても被告が當夜此筒を使用した事は動きません」是より判事は被告に向ひ判「其方日頃黒戸伯爵と何の様な交際を致した」武「何の交際も致しません」判「領地の

争ひから訴訟までも起したと云ふが！」武「ハイ其訴訟は今猶ほ落着致しませんが是は最
う私から屢々示談を申込んだ程の事で詰り借地人同士の争ひです」判「其方嘗て鐵砲を以
て黒戸伯を狙つた事があると云ふが幸ひ今日は黒戸伯も病中ながら出廷すると申すから之
より證人として伯を呼出す、左様心得よ」之にて愈々黒戸伯を呼出す事となれり。

嘘か實か知らざれど武保が申立は一々裁判官の疑ひを言破り、此上は唯だ黒戸伯の云立
一つにて直様無罪放免となるならんと思ふ人さへ少なからず斯る所へ役人に手を引れ躊躇
ながら入来りしは黒戸伯なり、伯は病の爲め痛く瘦衰へたれど眼に尋常ならぬ光りを現は
し先づ斜に武保を睨みたる様は何となく物凄く思はれつ、頓て伯爵は判事の前に出で最細
き聲にて偽りは申立じと誓詞を述べれば判事は之に向ひて言葉を叮嚀にし判「伯爵御病中
をも厭はず出廷ありしは一同の深く謝する所であります、先づ夫なる椅子にお掛なさい」
黒戸伯「イヤ椅子に倚る程の事はありません」判「然らば何うか貴方が身體に害を受けた
る一伍一什の申立を願ひます」此時満場は静まり返り針の落るも聞ゆる程なれば伯爵の聲

は最弱く最低けれど傍聴席の隅迄も響きたり伯「當夜豫審判事に申立し通り時間は確かに
覚えませんが獨り寢床に就きウト／＼する中に尋常ならぬ音の聞えしゆる火事にはあらぬ
かと起出て戸を明けしに一發の砲聲と共に右の脇腹へ非常の痛みを覺えました、扱は曲者
と思ひながら砲聲の聞えた方へ二足三足進む時に又も二度目の砲音が聞え肩先を撃れて倒
れました」判「第一發と第二發の間は何れ位の時間がありました」伯「二分か三分であり
ました」判「其跡で曲者の姿が見えましたか」伯「ハイ薪の後から飛出し庭を横切て畑の
方へ逃ました」豫審調べの時よりも稍や確かなる此返事に判事は少し首を傾けしが又も問
ひを發して判「曲者の衣類に見覚えがありますか」伯「あります彼れは荒き藍縷の背廣を
着け同じ色の脚絆を穿き頭には縁の廣い帽子を頂いて居りました」判事は卓子の上にある
武保が當夜の衣類を指し判「今仰有つた衣類と此着物と似た所がありますか」伯「最も似
て居ます、イヤ全く同じ衣類であります」判「フム左すれば貴方は其曲者を見認めたので
ありますか」伯「ハイ此時火は既に充分燃へ上り宛も白晝の様に明るくありました、其明

りに依て確かに星川武保を認めました」此恐しき一言に満場の傍聴人は殆んど地に齧伏すばかりに驚きたれど如何にせしか被告武保及び其辯護人等は宛も前以て此云立を心待に待居たる者の如く少しも騒がず少しも驚かず判事は鋭き眼を被告等の顔に注ぎ其返事を促すが如くなりしも被告等は唯だ虚心唯だ平氣返事をなさんとする様子さへなければ又も伯爵に打向ひて判「貴方の申立は容易ならぬ事柄ですが」伯「ハイ素より取返し附かぬ事は存じて居ます」判「貴方が初め豫審判事に云立た言葉とは全く違つて居ます」伯「ハイ違つて居ます」判「犯罪の當夜豫審判事が現場へ出張して調べた時貴方は曲者の姿は認めなんだと云ひ又太々郎が星川武保だと申立た時貴方は顔に怒りの色を現はし星川武保に限り此様な罪は犯さぬと證言したではありませんか」伯「ハイ其證言は全く事實に背いて居ます、彼時は日頃名譽も高く且後來に望みもある有爲の男子を罪に陥すのは惜しい者ゆゑ助けられるだけは助けて遣り度と存じました」判「夫が今は助け度無いと思ふのです」伯「ハイ其後段々と考へましたが彼を助け度いのは私一身の私情、裁判は天下の公事

であります私情の爲めに裁判を欺いては相濟ぬと存じ殊には私も今二三日に迫つた命でありますから、今まで虚言を吐いた事のない此潔白な身でありながら死際に至つて裁判を欺くは此上もない深い罪と思ひ前の申立を取消して實の罪人を知らせる爲めに此通り病氣を犯して出廷しました、眞の罪人は星川武保であります、私は彼を認めました」此明かなる言葉を聞き判事は被告武保に向ひ判「其方云立る事があるか」武保は立て天を拜し「武保は罪人ではありません、此心の清淨と此身の潔白は唯神の裁判に訴へます」此時傍聴席にありて日頃より武保を知れる貴夫人方の中には聲を洩して泣くもありしが武保が母なる侯爵夫人は餘りの事に心を失ひ其椅子と共に倒れて氣絶せしかば後にありたる醫師關登及び直家老人錦嬢等共々に抱起して場外に運び去れり、裁判所の開けてより斯る事は其例を聞かず、判事並びに檢察官に到るまでも暫しが間は驚き餘つて唯心のみ迷ふ如くなりしが其間武保と黒戸伯は互に眼を注ぎ合ひ目と目を以て痛く罵り合ふ如き様子が見えたるは此兩人の間に裁判官も見透し得ぬ大秘密の隠るゝにはあらぬかと怪まれたり。頓て満場の靜まる

を待ち判事は又も黒戸伯に向ひ判「伯爵日頃より武保が貴方を怨む理由がありますか」
伯「ハイ彼と私の間に年久しき訴訟がありますが此訴訟の外には別に怨みを受ける原因
はありません」判「武保が嘗て鐵砲で貴方を狙つた事があると申しますが」伯「ハイ併し
アレハ一時の冗談も同様で私も別に心には留めません」判「夫でも貴方は猶ほ唯今の申立
を云張りますか」伯「ハイ事實ですから飽までも云張ります、私は確かに武保を認めました
決して間違ひはありません」斯く云終りて伯爵も張詰めし心も弛み其力の盡きたる如く兩
の足蹠踏きて其儘背後に倒れ掛るを附添る役人抱き止めしに之も亦氣絶せしか將た其呼吸
を引取りしか正體なきこと死骸に異ならず依て之をも法廷の外へ出したり、此後にて引續
き利吉郷太郎を初め其外の證人數名を取調べたれど記す程の事なし終つて二名の僧正を出
廷せしめしが一人は武保が菩提寺の僧にして其云立は武保が申立に異ならず又一人は當夜
黒須村の道を通りたる僧侶なり其背後恰好とも前の僧侶と同じ事なれば夜目には随分見違
へ兼まじと思はれたり、是より檢察官の辯論あり又辯護人の演説あり。中にも大川萬英の

雄辯は満場の人を或は怒らしめ或は泣しめ、一切の嫌疑を悉く破り盡したれど唯黒戸伯の
證言ばかりは取消すに由なく殊に被告の爲め不幸と云ふべきは辯護の終りし時檢察官又立
ちて檢「黒戸伯唯今法廷の奥の一室にて死去したるに由り余は悲しみの爲に今は辯駁の氣
力なし、唯だ陪審院の公明なる判斷を仰ぐのみ」と陳たるが此短かき一言は其力千萬言の
雄辯にも優りたり、黒戸伯死去と聞き陪審員は一時に伯が爲めに哀みの念を生じたり、此
念の消ぬ中に其決を取れば哀れむ可し星川武保辯護の功も空くして終に有罪と定まり懲
役二十年に處せられたり斯くて其宣告も終り裁判全く閉廷を告げたるは夜の九時頃なりき
(以上獨立新聞の附録の儘なり猶ほ原文には檢察官及び辯護人の辯論等詳細に記あれど煩
を恐れて茲には略す)

二四 證人二人現はる

星川武保は終に懲役二十年に處せられたり。去れば辯護人大川眞倉の兩人は猶ほ思ふ仔

細ければ其夜の中に不服を云立て裁判の仕直しを願ひ出たり。素より此度の裁判は黒戸伯爵の確かなる証言に據りて武保の罪を定めたる者なれば黒戸伯爵自ら此証言を取消す迄は幾度裁判を仕直すとも到底其証なき次第には在れども大川と眞倉は彼是れと手間取らせる中に彼の第一の証人なる薄木お歌と鶴之助を探ね出し且つ太々郎にも口を開かせ其上にて黒戸伯爵を相手に取り更に大裁判を起さんと思へるなり、殊に又た黒戸伯爵が証言とても取消しの望みなきに非ず黒戸伯爵は既に死去せりと披露したれど醫師關登の施術にて再び其呼吸を吹返へしたり、素より病癒うけたる病人にて殊には裁判の爲めに張詰めし力を落したれば明朝まで生延る事も覺束なき程にはあれど猶ほ其心は丈夫にて人事を辨へ居る由なれば大川等は之に力を得伯爵が息の絶えぬ内に其証言を取消さしめんとて夫々工夫を廻らしたり。抑も此工夫は如何なる事なるや後に至りて判然せん。

夫は扱置きつ此裁判のありたる翌朝の事、判事輕養と警察長富地は此裁判に就き一切の残務を片附んが爲め書記鞭根を從へて裁判所へ出張なし居たるに一人の憲兵人來り富地に

向ひて憲「先日獄屋を抜出したあの鶴之助が今朝捕縛しました」鶴之助が武保の爲に第一の証人となる事は誰も知らざる所なれば富地は何の思案もせず富「イヤ捕縛たなら後程まで警察へ留置くが好い」憲「イヤ彼れは星川武保の事に就き是非とも申上げ度い事がある故警察長と豫審判事に逢して呉れと申します」富地は考へながら富「爾か何事か知らんか夫では聞て見よう」と云ひながら輕養に向ひ富「茲へ呼込んで好らうか」輕「好いとも武保の事と云へば僕も氣に掛るから早速呼び給へ」此言葉を聞き憲兵は退きたるが頓て鶴之助を速來りしかば富地は彼に向ひ富「ソレ牢を逃出しても所詮駄目な事だ何うしても憲兵には捕へられる一最う後悔したか」鶴「ナニ捕へられはしません自分自分で自首して出ました」富「逆も通れぬと斷念めて自首したのだナ」鶴「イエ憲兵が一生懸命になつて探しても私は人の知らぬ宿屋に隠れて平氣で居たのです」富「宿屋に！ウム宿屋の拂ひが溜つたので自首したのか」鶴「ナニ拂ひなどは溜りません、此通りですから！」と云ひながら衣囊より百圓近くもあらんと覺しき大金を取出せしは是れぞ先の日武保より貰ひ受けし金と知

らる鶴「拂ひには差支ませんが私は元々正直者ですから罪のない人を罪に落しては濟ぬと思ひ夫を助けて遣る續りで斯して自首しました」富「ナニ最と詳しく云て見ろ」鶴「イヤ星川武保様が罪もないのに懲役二十年に處せられたと云ふから夫を氣の毒に思つて自首しました武保様は無罪です、私は充分の證據を持て居ます」富地は疑ひながらも富「何れ何の様な證據か言つて見ろ」鶴之助は首を振り鶴「イヤ言へば吃驚なざる様な大變な事柄ですから迂濶には言れませんが第一に此附添の憲兵さんを何所へか退けて貰ひませう、夫に私の言立る事を一々筆記なさつて下さい」富地は性質温厚にして殊には輕義と違ひ今までも武保を助けんとして内々に骨を折りし事もある人なれば直に其言葉を容れ憲兵を退かしめ且鞭根に筆記の用意をさせて富「サ鶴之助申立ろ」是より鶴之助は先の夜武保に金を貰つて獄屋を忍び出し事（去れど牢番蘭太郎の事は隠して）夫より武保が後を追けて黒戸家の庭に入込み武保と黒戸夫人の問答を残り申きたる事、武保は夫人の情人にして彼の犯罪の夜前兩人忍び逢ひ手紙を焼きたる事、其跡にて何者か黒戸家に火を放ち伯爵を狙撃したれ

ば其罪は武保にあらぬ事、是まで武保は夫人を疑ひ夫人は武保を疑ひ居たれど互に其疑ひ晴れ、夫人が武保と共に逃亡せんと言出せし事より彼の黒戸伯爵が其所へ出來りて兩人を見認めたる事、伯爵が怒りの餘り終に法廷に出で無實の證據をなし武保を罪に落さんと誓ひし事まで落もなく白狀したり聞終りて富地は半信半疑の間に迷ふ如くなりしが輕義は痛く不機嫌にて輕「イヤ富地君、此奴は武保から彼の通り大金を貰つたから此様な事を言立るので充分に證據せねば了んよ」富地は領首き富「固より出來るだけの證據は盡さなくては！」と云ひながら暫し考へしが何か心に浮びしと見え小使を呼びて耳に口寄せ富「黒戸家の取次の下女と罪人星川武保とを呼で來い」と命じたり、暫らくして小使は命に従ひ黒戸家の下女を連れ來りしかば富地は之に向ひ富「此前の週間に夜の九時頃黒戸夫人に面會をした紳士があるがお前は覺えて居るか」下女「覺へて居ます」富「今でも其顔を見覚えがあるか」下女「ハイ能く見覺えて居ます」富地は是にて小使に目配せすれば小使は心得て武保を連れ來りしが下女は武保の顔を見るより下女「ア、此人です」武保は事の仔

細を知らざれば怪しみて富地向ひ武如何なる御用であります」富「イヤ用の次第は是で済だから又呼出すまで獄屋へ歸つて居なさい」是にて武保は怪みながら退きしが後に富地と輕箠は交るく下女に向ひて様々の事を問ふに其答ふる所鶴之助の言葉ほど詳しくかからねど筋道は少しの違ひもなし猶ほ其終りに至り黒戸家の長女雅子が彼夜窓の外に化物の徘徊するを見たりとて恐れし事より庭に多く足跡の残り居たる事まで話せしかば今は鶴之助の白狀に疑ふ所更になきゆゑ下女は放ち返し、鶴之助は獄屋に留置くべしとて又も憲兵に引渡したり、其後にて富地は輕箠に向ひ富「ソレ見給へ言はぬ事か、僕は初めから武保に限り此様な罪は決して犯さぬとて何度も君を諫めたのに！爾だ、昨日の法廷で辯護人大川が檢察官を駭撃して檢察官は是れほど充分な證據の上つた犯罪は是まで見た事がないと仰有るけれど吾々の目から見れば是れほど曖昧な犯罪は又と決してありません證人として出た人も自ら充分の證據を知らず檢察官其人すらも唯だ辯に任せて言暗まさんとするばかりで是ぞ犯罪の原因と思はる、だけの道理を擧得ません」武保は將に錦嬢と婚禮を結ばん

とする羨むべき身分なるに何を苦しんで黒戸伯を狙ひませう、要するに犯罪は地の底に埋まつて居るのに裁判は雲の上を撫て居ます、此裁判と犯罪とは百里も二百里も千里も萬里も食違つて居ます、と云つたが成る程暗に此事を指したのだ、ウム黒戸夫人の事は毛ほども云はず尤もらしい言譯を作り設けて、あれほどに辯護したのは剛い者だ感心だ」と溜息を發しつ、物語れど輕箠は獨り首を垂れて返事もなく挨拶もなし。

裁判の翌日の朝、彼の警察長富地と、豫審判事輕箠の兩人が裁判所にて鶴之助を取調べ居たると同じ刻限の事なるが年の頃三十四五にて田舎者に扮装し一人の男山堂家の女關に來り、代言人大川萬英に面會を請ひたり。大川は昨夜裁判の終りし後に直に不服の訴へをなし置きつ錦嬢其他の人々と共に侯爵夫人（武保が母）を護りて山堂家へ家り來り夫より唯獨り一室に閉籠りて後々の掛引を考へながら夜を明せしが已れに面會を請ふ者ありと聞き何人なるや知らざれど心に思ひ當る事もあると見え、其名前さへも聞かずして直に應接所へ通し置き其身も引續きて其室へと入行けり。件の男は大川の顔を見るより早く「貴

方が大川萬英君でありますか」大「左様！萬英とは私しの事ですが」「私は友人棟田に頼まれ先頃英國へ出張せし探偵です」大川は打首き大「爾だらうと思つたが裁判は既に昨日終結して！」探偵「イヤ私しも今朝停車場へ着くと直様此地の新聞紙を買ひ裁判の濟だ事を承知しました、實は最う裁判の間に合ふ様とて充分骨を折りましたが何分にも手間が取れて」大「イヤ夫よりも先づ薄木お歌は何うしました」探「漸との事で探し當て同道して今朝程此地へ着し、停車場前の旅宿に待せてあります」大「シテ其お歌は必要の事を知つて居ますか充分の證人になりますか」探偵は言葉に力を入れ探「イヤ知つて居ますとも私も道々種々の事を問ひ試みましたが、林町の別荘の事は充分に記憶て居る様子です」大川は顔に喜びの色を浮べ大「では早速此家まで連れて来て貰ひませう」探「心得ました直に連れて参ります」とて偵探は立去りたり。薄木お歌が裁判より一日晩れて着せしは此上もなき遺憾の事にはあれど猶ほ是より充分の役に立つ證人なれば大川は今更の如く打喜び直様使ひを出して眞倉をも呼寄せつ、事の次第を語り居る中探偵はお歌を連れて歸り來

れり、お歌は年既に三十を越へ中肉中背の女にして其顔色に青味を帯び荒々しく反返りて歩く様は誰が目にも英國生れの奉公人と知られたり、大川は先づ之に向ひ此度態々呼寄せたる事の仔細を言聞すに聲に應じて口軽く發揮くと返事するは證人として裁判所へ連れ出すに屈強の女なり大「お前は昨年軍の頃まで巴里の林町に奉公したと聞くが其奉公中に見聞した事を残らず聞せて貰ひ度い」お歌「ハイ妾は軍の時まで丁度丸々四年の間奉公しました彼の別荘は或る紳士の或る貴夫人と密會をする爲めに買入れた家であります。私は住込んで一週間も経ぬ中に直様其事に氣が附て此様な家に奉公するのは嫌な事だと思ひましたが給金が好くて用事が少いから夫に引かれて後には最う是ほど結構な奉公先はないと思ひました、併し主人は妾を疑ふと見へ何事も妾には知させませず、貴夫人が忍び來る前には小使を呉れて私を一日も掛る所まで使ひに出しました、妾は其様に隠されるは嫌ですから何うかして主人の内幕を知り度いと思ひ其工夫を致しまして、夫より一週間も経ぬ中に主人の本性を見届けました。主人は英人丸瀬と唱へて居ましたれど英人ではありません

矢張り此國の人です丸瀬と云ふ英人の名を借て居たのです」大川は聞き來りて不審を入れ
大「何うして其様な事が分つたのだエ」歌「ソレは貴方何の譯もありません、或日、主人
が歸る時私かに其後を追けて行きましたら大學街の立派な家へ這入りました、其前の店で問
ひました所其家は星川侯爵の住居で今這入つたのは武保とて其後嗣だと申しました」大「成
る程、シテ又其忍び逢た貴夫人と云ふは」歌「貴夫人の方も同じ工夫で見届けました、で
も貴夫人は大層用心の深い方で中々骨が折れましたが先で用心をするだけ此方も益々見届
け度と思ひまして幾度となく其後を追けてましたれど毎も道から馬車に乗りますゆへ分りま
せん、或時私しも朝の中から私に馬車を雇ふて置き夫で以て漸く其住家まで追けて行き
ました、尤も此夜は住家を見届けた丈で歸りましたが翌朝近邊の口入屋へ行て聞くと此家
にも矢張り英國の下女が住込で居ると聞きましたから少しの用事を拵へ此下女に逢ひまし
て色々聞きました所其貴夫人は春邊村に住居るが年々夏になると一月位宛巴里へ出て
來るので黒戸夫人と云へば貴夫人社會で誰知らぬ者はないと言いました」此明らかなる返事

を得て大川は最早や裁判所へ黒戸夫人の事を言立るに充分なりと思へば益々喜びて大「シ
テ其黒戸夫人とやらの顔を見た事があるのか」歌「ハイありますとも」大「では見覚えが
あるだらう」歌「あの美しい顔は一生忘れません、大川は茲に至り兼て斯る時の用意にと
て錦嬢より借置きたる寫眞帳を取出してお歌に示し大「此中に其夫人の寫眞があるか」
お歌は受取りて一枚づ、眺め居たるが歌「ア、是ですん」とて指示すは黒戸夫人の寫眞
なれば其言葉に今は少しも疑ふべき所なし大「フム夫だ、だがお前は今言つた丈の事
を裁判所へ出て言立ねばならぬよ」歌「嘘偽りではありませんから誰の前でも言立ます」
大「夫は有難い」とて之より相當の手當を與へ、裁判の終るまで或宿屋へ留置く事に約束
をなし、彼の探偵と共にお歌を宿屋まで歸したり。お歌が歸りたる後へ引違へて例の過激
醫者關登立關の外より「大勝利く」と叫びながら入來れり。抑も大勝利とは何事なる
や。

二五 犯人の自白

「大勝利く」と叫びながら入来る關登の顔を見て大「何事だ」と問掛ければ關「今棟田から知らせがあつた、大々郎に口を開かせ充分の白状をさせる工夫が附たから警察長富地と豫審判事輕養とを連れて今日の一時前に聞きに來いと云つて來た」此意外なる知せに大川は驚き大「ナニ太々郎に白状させるツて夫は實に大勝利だ、棟田の手柄は豪い者だ、早速富地と輕養を連れて行かう」と早立掛る所へ又も入来る人あり誰かと思れば裁判の書記鞭根なり鞭根は息もせわしく大川に向ひて鞭「非常な事件が初まつたから早く來て下さい富地輕養の兩氏が君方を待て居ます」大「爾か吾々も是から兩氏の處へ行かうと云つて居る所だが全體何う云ふ譯だ」鞭「イヤ鶴之助が今朝自首して出ました」とて之より鶴之助が富地と輕養に向つて言立し一伍一什を物語れば大川も關登も嬉しさに小躍し、三人齊しく馬車に乗り、裁判所を指して急がせつ馬車の中にて大川は薄木お歌の顯はれたる事より其

言立し次第を關と鞭根に告げ聞せたり。頓て裁判所に入り行けば輕養は非常の不機嫌、富地は非常の上機嫌にて兩人を待ち居りて富「大川君委細の様子は最も鞭根から聞たであらうナ」大「聞きました但吾々も亦君方を驚かせる事がある」とて薄木お歌の事を語り聞すれば輕養は茲に始めて武保を疑ひたる我身の過ちを悟り失望して思はず嘆息す、之に引換へ富地は充分の喜びを現はして富「夫では最ふ武保の疑ひは全く解けた」と聞て關登進み出で關「勿論サ、本統の罪人が外にあるのだから僕が其罪人を知つて居るのだ」兩人は一様に驚きて、本統の罪人とは誰だ關「オイ、君達に引合せるから早速病院まで同道したまへ」此時既に十二時を過ぎたれど一同は餘りの事に食事を打忘れ其儘打連れて病院に急ぎ行けり、斯て關登の案内にて一同彼の太々郎と胡弓師田棟の入れ居る癩室の後手に忍び入り、壁の窓より室内を窺き見るに太々郎と田棟は打解けて戯るゝこと宛も小犬と小犬の如し、此時田棟の棟田は早くも人々が既に來りしを悟りしと見え胡弓を取て徐ろに彈鳴らすに其調の妙なること殆ど人々をして魂までも鎔けるかと思はしめたり。人々

は猶ほ呼吸を凝して窺き居るに不思議や胡弓の音の耳に入ると齊しく太々郎は我を忘れて
躍るが如き身振をなし其調子高くなれば彼れ延上り低くすれば彼れ身を屈め急なる時は眉
を撃め緩なる時は笑を含む、其一撃一笑凡べて田棟が胡弓の儘なり實にや猛き熊荒き狼豺
も音楽を聞入る、の天性ありとは此道理なるべし田棟は頓て時を計りて椅子の下より兼て
用意せる酒の徳利と猪口を取出し一盃注ぎて太々郎に與ふれば太々郎はグツと呑干し得も
言へぬ味ひの顔をなして太「旨い―旨い―旨い田棟は之より胡弓を鳴らしては酒を呑しめ
呑しめては又胡弓を鳴し、終りに至りて其徳利を與ふるに太々郎は我息の盡るまで呑み込
みて太「ア、旨い」田棟は胡弓の調子を最も低く最も細くし我言葉を之れに合せ棟「太々
やお前は春邊村で此様な酒を呑だ事はあるまい」と問ふに彼れ今は酒と胡弓に浮されて
太「あるとも酒屋の樽の後へ隠れて菓の管で呑んだことがあるワ」棟「天では春邊村へ歸
り度か」太「ア、歸りたい」棟「夫ほど春邊村が戀しければ何故あの様に黒戸家に火を放
けた」太「ナニ火を附る積りじやないのヨ、薪を燃えて伯爵を誘き出す積りであつたら風

が強くて家まで焼たのサ」棟「何故お前は伯爵を狙つたエ」太「夫人を武保の女房にして
遣らうと思つてサ」棟「では夫人に頼まれたのか」太「い、や頼まれはしない、あの晩夫
人が裏の畑で武保に逢ひほんに所夫がなければ好いにつて泣て居たから己は可愛想に思つ
て殺して遣つた、夫人は毎も己を可愛がつて呉れるのに伯爵は叱るから面が悪くて」棟「夫
ではお前何故星川武保が罪人だと言立たエ」太「だつて火消の野郎が己を疑ひ此火は太々
が放たのだらうと云つたから己は逃れる積りで、ナニ己ぢやない星川だと胡魔化したのヨ
すると外の奴が聞附けて遂々己を判事の前へ引出したんだ」棟「お前は何うして鐵砲を持
て居たエ」太「伯爵の小鳥銃を盗み出したのさ、今まで其鐵砲を己れが隠れて居た岩穴へ
隠してあらあ」ア、太々郎は果して關登の見抜たる通りなり、馬鹿にあらず痴頑なり關登
は日頃過激の性なれば茲に至りて堪へ兼ね思はずも聲を發して「關「出来した棟田、豪い豪
い」と賞たるに此聲にて太々郎は忽ち事の意を悟り身を躍らせて室外に飛出んとするを棟
田は直ちに取て押へ用意の繩を衣囊より取出して後手に縛り上たり。

此時裁判所より至急の使ひ來りて富地向ひ「武市村の和尙が至急に面會を願ひ度と申します直にお歸りを願ひます」と告るに病院の用既に済みたる事なれば太々郎を引立て棟田をも連て一同裁判所へ引返せり裁判所には彼の武保が菩提寺なる武市村の和尙待居りて富地向ひ一通の手紙様の物を差出し和尙「黒戸伯爵は今朝愈々死去致しました是は伯爵が死際の懺悔状であります、何うぞ人々の前で聲高くお讀上げを願ひます」富地は受取りて人々に讀聞す其文に曰く「余は臨死の際に非常なる罪を犯し悔恨に堪えず、余は宗教信者なるが故罪を隠して死するに忍びず今は残らず白狀せん、余は裁判官を欺きたり、余は星川氏が余を狙ひたりと言立しも這は偽りなり、余が家に火を放ち余が身を狙撃せしは星川氏にあらす余は全く其誰なるやを認め得ざりき、然れども其星川氏にあらざるは堅く保認する所なり、神よ裁判官よ、星川氏よ余が一時の怒りに心暗み偽りの證言をなせし事を許し給へ、余は全く彼の證言を取消すなり、黒戸伯爵謹んで述べ」とあり又一片の別紙を添へ「余は自ら余が妻の不貞の罪を許すゆる妻の不品行は飽までも内分に秘せられたし

是れ余が末世の願ひなり」とあり。

之にて武保が身は全く無罪と分りたり。去るにても黒戸伯は何故に其證言を取消させしや是れ大川と眞倉が武市村の和尙に頼み、和尙は伯爵の枕頭に臨み偽證の罪の重きを説き又懺悔によりて其罪の亡ぶるを説きたるなりけり、伯爵は臨終の恐しさに堪え兼て熟々後悔せしに由るなり、斯て富地より以上に記す次第を裁判長に言立しかば更に豫審の仕直しとなれり。固より黒戸夫人と武保との交情ありし事は少しも言立ざれど既に眞の罪人なる太々郎の現はれし上殊には彼れが岩穴に隠し置けりと言ふ彼の鐵砲を探さしめしに其言葉に相違なく一挺の小鳥銃と外に散彈袋まで隠しありたれば裁判官も其外の事は深く問はず是より三日目に武保は放免せられて青天白日の身となりたり此後の事は詳しく記さずとも讀者は必らず推量し得ん。

黒戸伯に續きて黒戸家の季の娘も死し黒戸夫人は姉嬢雅子を連れ其親許なる田澤家に歸りたり。今まで交際社會に鳴渡りし夫人なれど今は一切の交りを絶ち一室に籠りて沈黙に

世を送れば世間の人は事の元を疑はず唯だ所夫を失ひたる悲しみに沈める者ならんと言囉せり、後一月を経て武保は武市村の寺にて錦嬢と婚禮せり、其時武保の附添人は眞倉と關登なり錦嬢の附添は大川と富地なり。輕篋判事は最遠き亞非利加のアルジュールと云へる所へ轉任せられたれば此席に臨み得ず、鞭根は其姉妹と共に今は裁縫店の頭取となり、蘭太郎夫婦は錦嬢より食ほりたる大金を残り少く浪費し今猶ほ元の牢番なり、鶴之助は屋川家の領地番に雇はれて居り薄木お歌は其妻となれり。探偵棟田は辭職して林町の別荘に移り菓物の手入に餘念なし巴里の料理屋にて珍客に供ふる第一等の寒桃は此別荘より出る者なり看客若し巴里に到らば忘れず其桃を味ひ給へと爾云ふ。

有罪無罪 大尾

昭和十七年六月十日 印刷
昭和十七年六月十五日 發行

不許
複製

定價金壹圓也

著者 黒岩 涙香
 發行者 大川 錠助
 印刷者 大島 敏郎
 印刷所 東京市淺草區淺草橋二丁目十三
 太英社 印刷所
 東京市神田區淡路町二丁目九
 配給元 日本出版配給株式會社
 東京市淺草區藏前三丁目六番地

發行所

會社名 天川屋書店
 電話淺草二一七八番
 振替東京四〇〇九番
 會員番號 一〇五五〇九番

終



大川屋書店發行

● ¥1.00